

Rohinton Mistry の *A Fine Balance* 論 — インド国民形成のナラティブという視点から —

加 藤 恒 彦

What sense did the world make? Where was God, the Bloody Fool? Did He have no notion of fair and unfair? Couldn't He read a simple balance sheet? (AFB, p. 595)

Yes, he would see all this with his own eyes. If there was an abundance of misery in the world, there was also sufficient joy, yes,- as long as one knew where to look for it. (AFB, p. 598)

序論

*A Fine Balance*¹⁾ (『美しきバランス』以下『美しき』) (1995年)は、カナダ在住のインド人作家ロヒントン・ミストリー (Rohinton Mistry) の二作目の長編小説であり、ブッカー賞の最終選考名簿に残り (1996年)、英連邦文学賞 (1996年) を受賞する等数々の文学賞を受賞。1980年代以降のインド英語文学を代表する作品の一つである。

作品について論じる前にまず、物語の基本設定を明らかにしておこう。

物語の基本設定

物語の現在は、1975年5月、インドラ・ガンジーによって非常事態が宣言されてからの約1年間の時期に置かれている。と言ってもこれは権力を巡る政治小説ではない。むしろ政治を自分たちとは関係の無いものとして遠くから眺めつつ、生きることに必死の貧しく無力な庶民の物語である。だが政治・社会の荒波は否応なく彼らの人生を無慈悲に翻弄するのである。

物語の主な舞台は、ムンバイを思わせる「海辺の都市」である。プロローグでは、いわば、これから出港する船の船長のもとに二人の乗組員と一人の乗客がやってきて船長と顔合わせをする。

船長はディナ・ダラル (Dina Dalal)。ディナはインドで少数派に属するパーシー教徒 (Parsi)

で42歳になる未亡人である。ディナは、アパレル・ブランドの海外輸出会社からの注文生産を請け負うビジネスを自宅で始めたのである。二人の乗組員はディナの募集のチラシを見てやってきた仕立て職人で、ディナと同年代のイシバとその甥のオムである。二人は、北部の農村でヒンドゥーの不可触民として生まれ、仕立屋に転職し、ある悲劇的な出来事の後、仕事を求めてこの都市にやってきたのである。そして乗客は、ディナの学校時代の女友達の息子マネックである。マネックも、ディナと同じパーシー教徒である。彼は、非常事態宣言下で大学のホステルで起きている理不尽な事態にいたたまれなくなり、ディナの家の下宿することになったのだ。

『美しき』は、ディナ号が非常事態宣言下の荒海に翻弄され、何度も難破の危機に直面するなかで、四人の関係がギクシャクしたものから次第に変化し、ついには一つの美しい人間的共同体を築き上げて行く過程を描いている。しかし、物語はそこで終わるわけではない。その次の瞬間、大波がディナ号を再び襲い、船は脆くも破壊される。そして8年後、4人が再会を果たしたときに何か起きるのか？それがエピローグのテーマである。

『美しき』についてのこれまでの文学的評価

『美しき』についてのこれまでの文学的研究・評価の数は未だ決して多いとは言えないものの、読む人によって大きく評価が分かれているのが特徴である。例えば、ニューヨーク・タイムズ誌の書評²⁾は、「小説の不可避的没落について語り続けている人々は、ちょっと待って欲しい」として、『美しき』がまだまだ世界に知られずして存在している多様な人間経験を掘り起し、フレッシュな感動を与えてくれる優れたリアリズム小説として評価している。そしてこの小説は欧米の読者を中心に熱烈な支持者を得ている。³⁾

ところが、それとは対照的に、あるオーストラリア作家は、『美しき』がブッカー賞にノミネートされたと知ると、BBCのインタビュー番組で「私はこの小説が大嫌いだ。・・・ミストリーが描くインドは、インドで教えた4カ月の間に私が知ったインドとは似ても似つかない」と述べている。⁴⁾

またインドの研究者には、この作品がインド社会の現実をリアルに描こうとしながらもそのビジョンが「ペシミズムと絶望に特徴づけられている」という評価をしたり⁵⁾、ミストリーがカナダ在住のディアスポラ作家であることから、外部者としての有利な視点を持ちながらもヨーロッパの観点からインドの現実を歪めており、「インドの暗い現実を見たいと思うヨーロッパの読者に阿っている」⁶⁾としたり、ミストリーがパーシーの作家であることから、パーシーのことを書いている限りは信頼できるが、ヒンデュー教徒の世界、特に農村をのカースト制度を描いているところは真実とは思えない、と否定的な評価をする。⁷⁾ それに対し、同じインド人の研究者で、ミストリーは外部者の利点を生かしインドの厳しい現実、重要な問題を大きなス

ケールで正確にかつ文学的にも豊かに表現していると、作品の多面的分析に基づいて弁護する人もいる。⁸⁾

左翼の研究者からは、この小説のサバルタンの反抗は個人的なものであり、権力への組織的反抗の道を指し示さないことにより、権力関係を固定化してしまっている、と違った角度から批判をしている。⁹⁾ また、類似の指摘として、「ミストリーはインドの政治の積極的な側面を意図的に無視している」とする指摘もある。¹⁰⁾

こうしたなかで私が知る限り日本人の研究者の場合、最近出版された日本で初めてのインド英語文学の研究書¹¹⁾ではミストリーの他の作品に焦点があてられ、この作品は取り上げられていず、またインド英語小説を特集した『英語青年』ではミストリーの他のパーシー教徒のコミュニティーを描いた作品を好意的に紹介しつつ、この作品に関しては、ミストリーがインドの階級やカースト制度の問題にまで視野を広げて書いている点に疑問を感じているようだ。¹²⁾

本論の視点

私見によれば、これらの肯定的評価も否定的評価もともに『美しき』の同じ側面について語っており、ただ、それについての評価や受け止め方が違うのである。「同じ側面」とは、『美しき』の4人の主人公のうちの特に二人、インド北部の農村の最下層に位置づけられてきた不可触民出身の仕立屋イシバとオムが故郷の「河辺の村」や「海辺の都市」で遭遇する理不尽としか言いようのない体験のことなのである。理不尽とは、「公正な扱い (fair treatment) の埒外にある人間への抑圧や暴力である。だが、理不尽さは、この作品に限られたものではない。むしろ特にインドの農村の世界を描いたインドの英語文学の世界に通底するのか、この理不尽さである。とすれば、この理不尽さをどう見るのかが、インド英語文学を理解・評価する上での一つの重要な試金石である。筆者は、イシバやオムが体験する非常事態宣言下の理不尽な出来事の描き方を基本的に肯定しつつ、描かれた出来事がある時期の理不尽な出来事というにとどまらず形を変えて今なお存在する重要な問題だという観点から丁寧に分析して行きたい。

だが、もし『美しき』がイシバとオムだけの物語であったならば、多くの読者、その殆どが大学で教育を受けた中産階級であろうインド英語文学の読者や欧米のインド文学に関心を寄せる読者層の大きな支持を得ることはできなかったであろう。そこにディナとマネックを登場させた大きな意味がある。つまり、ディナという恐らくは読者と同じ中産階級の背景を持ち、かつ女性としての自立の為に闘うたくましい女性をイシバとオムの雇用主として登場させ、さらにマネックというリベラルな家庭教育を受けた大学生が下宿人として加わり、四人で振り掛る理不尽な事態に対処してゆくなかで、この四人の間に友情が成立してゆく姿を描くことにより、イシバやオムの人生を読者の側に引き付け、やがて読者がそれに一体化し、階級や宗教の違いを超えることを可能にしているのである。

人間の共同性の美しさ

この4人の中の友情の成立過程の物語は、イシバとオムの体験する現実の過酷さとは対照的に独自の魅力を獲得し多くの読者の共感と呼んでいる。読者の共感の源泉は、彼らの関係性が階級的、カースト的、宗教的境界を越えて変化してゆく過程と、そこから生み出されてゆく新たな人間関係の絆にある。作品のこの要素は、異なった階級・カースト・宗教の人々がほとんど交わることがないと言われるインド社会¹³⁾のなかでは極めてまれなものであり、ユートピア的ということもできよう。

だが、作品はユートピア的要素の美しさだけではなく、その脆さも描いている。それが描かれているのがエピローグであり、変わり果てた二人の職人に対するマネックの受け止め方に表れている。しかし、ミストリーはディナと職人たちの間には変化した関係のなかでも絆が、ユートピア的要素が維持されていることを最後に描いている。

だが、既存の研究や書評のなかでは、このディナと職人たちとの間の関係性の友情への変化の性質や、それがどのようにして成立してゆくのかについて、個々の分散的な指摘はあるものの、この観点からの首尾一貫した分析や検討が行われているとは言い難い。

以上のことから、拙論では、職人に転じた二人の不可触民の農村と都市での理不尽な体験の分析と、ディナと2人の職人の関係性の友情への変化に絞り、タイトルの意味とも関連して論じて行きたい。それがこの作品の本質の理解にとって不可欠だと考えるからである。

だが、イシバとオムの物語やディナとの関係性の物語は、単に個人的な次元の物語ではない。それは、より大きな社会的視点から見れば、Peter Moreyも指摘しているように、インドの国民的アイデンティティ形成、すなわちインドをどういう国にして行くのかという大きなテーマに関わっているのである。¹⁴⁾

実は、1947年のインド独立に際し、ネルーは、インドがめざすべき国家像として、世俗的で民主的な国家という理念をうちだした。世俗的とは、宗教的宗派の違いで人が優遇されたり、差別されたりしない社会を目指すという意味であり、民主的なインドとは、カースト、階級、性による差別の克服をめざすことを意味した。言い換えれば、宗教的、カースト的、階級的、性的相違を乗り越えた平等なインドを目指すべき理念として掲げたのである。そしてそれは半世紀近い独立のための闘いの中で追求されて来た理念でもあった。だがそのような理念を掲げることにより、その理念と現実との間のあまりにも大きな落差に人々は直面することになる。だからこそ、多くのインド人文学者がその落差（それを理不尽さと呼ぶこともできよう）を問題にし、作品で描いているのである。つまり、インドの独立以後の優れた文学は、現代を描くにせよ、歴史に素材を取るにせよ、インドのあるべき国家・国民像を巡って、その理想と現実の間の乖離を批判的に描くことにより、国民に問いを投げかけているのである。このように天下国家の大きな問題を正面から取り上げ、人間の物語として描くところにインド文学の魅力が

あり、『美しき』はそれをカースト制度やスラムの住民や路上生活者等を取り上げ、大きなスケールと歴史的視野で描きつつ、階級的・カースト的境を超える新たな共同性が局所的、個人的レベルであれ実現する物語を描くことによってインドが取るべき方向性を示唆しているのである。

本論

カースト制度の下での不可触民の物語

「海辺の都市」に辿り着くまでのイシバとオムの物語は、独立前夜の時代から独立を経、70年代初頭の時代に至る北部の農村における不可触民の三代に渡る物語を背景にしている。その物語の根底に流れるのは、オムの祖父に始まり、その息子ナラヤン（イシバの弟）に引き継がれるカースト制度の壁に対する不可触民のサバルタンの反抗とそれに対する上位カーストの地主（タクール）による過酷で理不尽な報復である。

そのような不可触民のサバルタンの反抗の背景には、独立前夜のインドの新しい動きがあった。ガンジーが、国民会議派によるインドの独立運動の理念としてカースト制度や不可触民の地位の撤廃を大きな目標の一つに掲げ、自身不可触民の出身であったアンベッカー博士がインドの憲法草案を書きあげ（1949年）、そのなかで不可触民の廃止を謳い、翌年にはそれが発布されるのである。しかし遅れた農村では、悠久の伝統は独立後20数年経った小説の現在においてもそう簡単には揺らいではいなかったのである。

また、インドの分離独立（パーティション）の際のヒन्दゥーとムズリムの間の悲惨な相互殺戮もこの物語のなかに組み込まれていて、ヒन्दゥー過激派がムズリムの仕立て屋アシュロフの店に押しかけたとき、アシュロフの下で修業したイシバとオムが、アシュロフ夫婦の命を救うのである。カースト制度と並び、ヒन्दゥーとムズリムの抗争は、今なおインドの国民的アイデンティティを規定する重要な要素であるが、この作品に描かれた宗派を超えた友情が分離の際の狂気に打ち勝つエピソードはインドのアイデンティティ形成における未来に引き継ぎたい要素であろう。

以下、北部農村のカースト制度とそれに対する不可触民のサバルタンの反抗とその結末がどのように描かれているのかに焦点をあて検証してゆこう。

カースト制度の下での不可触民の生活と反抗—独立前夜から独立後

イシバとオムは不可触民（Dalits）の子として生まれた。だが、「オムが生まれるずっと前、父親のナラヤンと伯父のイシバが10歳と12歳の子供だった頃、二人は父親によって服の仕立て屋の修業に町に出されたのである」。(AFB, p.95)しかし、カーストを変えるという行為はカー

スト制度への大胆な挑戦であり、以前であれば決して許されない行為であった。ではそもそも不可触民とはどのようなものであり、何故、父親は息子たちを仕立屋にしようと考えたのか？又、それはどうして可能となったのか、「河の畔の村」の前半部分はその顛末を描いている。

不可触民は、ヒンデュー教の4つのカーストのその下に置かれ、第五のカーストとも呼ばれ、穢れた存在としてさげすまれ、人糞の処理、皮なめし、靴の修理、地面や通りの清掃等の様々な職業に、それぞれ世襲的に就いていた。不可触民とは総称であって、その内部には、属する職業によって異なる名で呼ばれる集団が存在し、相互の間にも、カースト的上下関係が存在する。¹⁵⁾

イシバの父親デューキ・モチ (Dukhi Mochi) (モチは皮なめしを職業とする人々の名) は、「死んだ牛や水牛の皮を剥がし、その肉を食べ、皮をなめし、サンダルや鞭の水入れを作る」(AFB, p.95) ことを生業とするチャマー (Chamaar) であった。デューキも5歳になると父親のかたわらで家業を学んだ。死んだ牛の悪臭のする皮を加工する仕事のために、絶えず悪臭のなかで作業が行われ、それがやがて体臭の一部となるのだ。デューキは、ある日、母親に「誇りと悲しみ」の入り混じった調子で、「お前も大人になってきたのだね。匂いを嗅げばわかるよ」(AFB, p. 96) と言われて初めてそれに気がついたのだ。

彼らの村は河の畔にあり、上流にはブラーミンや地主カーストが住み、不可触民は下流に住んだ。不可触民の男たちは、夕暮れになると川辺の木の下に集まりその日の出来事について情報交換し、家に帰ると妻に聞いたことを語るのである。それをそばで聞ながらデューキは不可触民とは何であるかを学んでゆくのであった。

不可触民は、穢れた存在と見なされ、村の井戸から水を飲むこと、ヒンデュー教徒であるにもかかわらずヒンデュー教のお祈りに参加すること、そして学校に通うことも許されなかった。盗みの嫌疑をかけられるだけで腕を切り取られたり、若い娘が地主の息子との性交を拒否したために頭を剃られ裸で村の広場を引きまわされると言ったことがまかり通るのであった。だからデューキも10代になるまでには、目には見えないカーストの境界線が存在し、生きて行こうとすると、自分たちは決してその線を越えてはならないという掟を十分に学んでいたのである。

18歳になるとデューキは14歳のルーパを嫁に迎え、やがてルーパはイシバを出産する。男子が生まれたことでルーパは大喜びし、不可触民の母親ならだれでもそうするように、息子に十分な食べ物を与えるためには、自分が飢えることも厭わず、地主の牛のミルクや果樹園の果物を盗む危険を冒したのだ。

その二年後ナラヤン (Narayan) が生まれる。夫婦は産婆から「この子は勇気と寛大な心をもっていて、自慢のこどもになるよ」と言われる。だが、これが同じ頃嫁をもらったものの跡継ぎとなる男子を授からなかった高位カーストのいくつかの家族の妬みを買ひ、高位カースト

の間で様々な議論を生むことになる。

そのような噂がデューキの耳に入ると彼は細心の注意を払い、高位カーストの怒りが家族におよぶようなまねをしないよう振る舞ったのである。しかし、そのように慎重なデューキの考えを変えさせたある理不尽な事件が起きる。

デューキは村の地主 (Thakur) のプレムジ (Premji) に呼び出され、赤唐辛子の脱穀の仕事に頼まれる。しかし、仕事をほぼ終えたころ石臼が突然割れる事故が起き、片方の石が足に当たりデューキは怪我をする。だが、それをたまたま見ていたプレムジの妻は「チャマーが石臼を壊してしまった！」(AFB, p.104) と大声を上げ、デューキの抗議にもかかわらずプレムジにとがめられ、背中を棒で撃たれ、ほとんど済ませてしまっていた仕事の報酬ももらえないまま怪我した足を引きずり家に帰ったのである。

デューキは、この出来事以来村で仕事をするに見切りをつけ、遠い町にまで出かけ、路上で皮のサンダル修理の仕事始める。そして、ムズリムの友人で仕立屋をしているアシュロフと再会する。それはガンジーに率いられた国民会議派の独立運動が高揚し、地方の農村にも指導者がやってきて演説会を開く時代であった。ガンジーは、独立運動の理念の一環としてカースト制度と不可触民制度を、幾世期にも渡りこの国を蝕んできた病氣と捉え、インドの社会、人々の心から追い払わないといけない、と訴えたのだ。そうした時代の雰囲気の中アシュロフは、デューキの二人の息子を自分の店に修業に出し、仕立屋にしないか、ともちかける。アシュロフは「時代は変わりつつある」(AFB, p.108) と言うのだ。だが、生まれてこのかた村の地主の専制的な支配を体験してきたデューキは、にわかに地主が変わることなど想像できないのだ。

だが、やがてそのようなデューキの気持ちを変える事件が起きる。不可触民の子供は学校に行けなかったのであるが、イシバとナラヤンが好奇心から学校の教室に入り、石版とチョークを使っているところを教師に見つかり、大勢の生徒の前でひどい折檻を受けたのである。それに憤を覚えたデューキは、公正な裁きで誰からも尊敬されている村のブラーミンの長老に直訴する。しかし、そのブラーミンは、この世の秩序としてのカースト制度を守ることが幸せにつながる、としたうえで、教師がその秩序を乱そうとしたイシバとナラヤンを罰したのは当然であると言い切り、「お前の子供は教室に入り、その場所を汚し、学びの道具に触れたのだ。・・・その場に聖なるテキストが無かったことがせめてもの幸いであった。そうでなければ罰はもっと決定的なものとなっていただろう」(AFB, p.113) と言い放ったのだ。その晩、デューキは子供たちを町のアシュロフのところへ送りだす決意をしたのだ。インド独立前夜の新たな世の中を予感させる時代だからこと可能であったろう大胆な決意であった。

パーティションの悲劇のなかで

やがてイシバとナラヤンが休業期間を終える時が来る。イシバが18歳、ナラヤンが16歳の時である。だが、それはあの悲惨な分離独立の時期で、パキスタンとの国境線で起きたヒンドゥーとムズリムの間の相互殺戮が内陸部にも広がりを見せ、ヒンドゥーによるムズリム住民への無差別的殺戮の狂気を引き起こしていた時期である。そこで二人は、騒ぎが収まるまで村に帰るのを延期する。

村ではムズリムの住人がそもそも少なくヒンドゥーとムズリムが平和に暮らしてきたため、大きな騒ぎにはならなかったが、人口が多く噂話が力を持ちやすい町では事情は違った。それまでこの町でも、ヒンドゥーとムズリムは平和に共存していたにもかかわらず、外部からやってきたヒンドゥー過激派組織がムズリムの脅威についての噂を煽り立て、人々の心に不安を煽っていた。そのようななかで、アシュロフ一家もパキスタンに逃れる相談をしていたのだが、ある日、町内のヒンドゥーの店主たちがアシュロフの家を訪れ、思いとどまるよう説得する。パキスタンとの国境を行き来する列車が双方の宗派の攻撃を受け、大量殺りくが進行しているというニュースが伝わっていたのだ。そしてヒンドゥーの店主たちはアシュロフ一家を過激派から守ってやると約束したのだ。こうしてアシュロフ一家は町に留まることにしたのだが、その直後、彼らの町でも暴徒のムズリムへの攻撃が始まる。最も貧しい階層の住む地区から次々と広まり、焼かれる家が増えて行き、とうとう武器を持った集団が彼らの店の前までやってくる。彼らはここがムズリムの店であるという情報を得てやってきたのだ。イシバとオムが対応にでて、ここはヒンドゥーの店であることを強調するが、暴徒のなかには、二人の言うことに耳を貸さず、つべこべ言わずに焼いてしまえ、と扇動するものもいる。そこでその集団の指導者は、二人に下着を脱ぐよう命じ、割礼をしていないことを、つまりヒンドゥーであることを確かめる。そのとき、隣の雑貨店の主人が、大声で、なんでヒンドゥーの店を困らせるのだ！と加勢し、他の店主たちもそれに倣う。こうして宗派の違いを超え、ヒンドゥーの店主たちと職人たちは、アシュロフ一家の命を救ったのだ。

独立後の村と仕立屋に転じたナラヤン

独立とともに不可触民の物語は後半に入る。デューキの時代からその息子の時代になるのだ。そして物語の焦点は、村に帰って仕立屋を始めたナラヤンに移る。この勇敢な男がどのように遅れた村のなかで抵抗の象徴として生き、そして最後には壮絶な死を迎えるのかが描かれる。

パーティションに伴う危険が去った後、イシバはアシュロフの助手として町に残るが、ナラヤンは村に戻り、デューキの家の片隅に仕事場を設け、仕立屋の仕事を始める。そして、そのことを村のチャマーたちは密かに誇りに思い、貧しいなりに衣服の仕立てをナラヤンに注文し始める。そして前代見聞のことを成し遂げた仕立屋がいる、という噂が近隣の村々に広がると、

興味本位のお客も含め、しだいに客が集まり始める。

ある日、不可触民のブンギ (Bhunghi = 人糞の処理を行う職業で、不可触民のなかでも最低位に位置づけられていた = 筆者) が恐る恐る客としてやってくる。すると母のルーパはいたけだかにブンギを追い返してしまう。それを見たナラヤンはあわてて追いかけて引き戻そうとする。母親は顧客として「ブラーミン (僧侶階級) ならいいが、ブンギはだめだ」と言い張る。その晩、ナラヤンは、父と母を前に、自分を町に送ったのは何故かと問いかけ、「上位カーストの連中のひどい扱いのためじゃないですか。ところが今や父さんたちは、やつらと同じように振る舞おうとしているのですよ！」と訴え、「もしそれが父さんたちの望みなら僕は町に戻ります」(AFB, p. 22%) と訴える。こうして最初は、母の立場に同調しかけたデューキも、息子の意見に同調したのだ。

ナラヤンの仕事は繁盛し、2年後、次第に上位カーストの多くよりも裕福になり両親の家のすぐ近くに自分の小屋 = 仕事場を建て、両親を住まわせることができるようになる。そしてナラヤンに嫁をとという話が一気に進み、その噂は村の上位カーストにも伝わる。村の上位カーストは、元々チャマーが仕立屋になり成功していることに怒りや恨みを持っていたのであるが、地主のタクール・ダラムシ (Thakur dharamsi) は、婚礼の祝宴に呼ばれていた楽団に圧力をかけ、直前になってに参加を断られせる。町から代わりの楽団を自前で呼んだのはイシバであった。上位カーストの干渉に負けられないためにはお安いものだとイシバは考えたのだ。

結婚に際しナラヤンは、伝統的な考えに捉われ、持参金を受け取るのを当然の権利だとする両親の困惑と抵抗をはねのけ、嫁の家族からの持参金 (Dowry) の受け取りを断り、式を簡易に済ませる。持参金制度は、娘の両親がそれをまかなうために金貸しに借金するなど大きな負担となっていたからだ。(女兒が三人生まれたら家がつぶれると言われるほどこれは結婚の際に大きな負担となり、現在でも女兒が疎まれたり、中絶される原因の一つである = 筆者)。そしてイシバもそれに賛成する。

やがて生まれた男子がオムであった。ナラヤンは仕事のかたわらオムに読み書きや裁縫を教え、父と子の間に親密な関係が生まれる。そしてオムが5歳になると、ナラヤンは息子を皮なめしの現場に連れて行き、仕事を教えようとする。しかしオムは臭く汚い仕事をいやがり抵抗する。妻のラダは、「息子にあんな汚い仕事をさせる必要はない」と言うのだ。それを聞くとナラヤンは珍しく大声で「汚い仕事だって！チャマーの娘のお前が！」と叫ぶ。「もし自分のおじいさんたちがしてきた仕事を知らなかったら、どうして今自分がしている仕事のありがたみがわかるようになるのだ」とナラヤンは妻に言う。夕方、父親の足をさすりにきたオムを抱きながら、ナラヤンはオムと自分の手のひらを匂い、「正直ものの匂いだ」(AFB, pp.140-141) と教え、オムはうなずく。そして次の3年間オムは皮なめしの仕事を毎週習い一通りのことができるようになる。8歳のときにその修業は終わり、オムはイシバのいる町に送られ、仕立屋

の仕事を選び、町の学校に行くようになる。村とは違い、町ではカーストにかかわりなく学校に行ける時代になっていたのだ。

ナラヤンの抗議

それから4年後、ナラヤンは父親の足の裏をもみながら自分が考えていることを語り始める。それは不可触民の地位が、独立から20年もたつのに少しも変わらず、上位カーストの連中が彼らを動物よりひどい扱いしかしないことへの不満である。ナラヤンは、「俺は村の井戸から水が飲みたいし、お寺でお祈りもしたいし、好きな所を歩きたい」、という。デューキは、「自分がカースト制度の掟を破りイシバとナラヤンを仕立屋にするために町に練り出した時のことを思い出し、息子を誇りに思う反面、その行為がもたらす結果への恐怖を感じ、・・・お前は今や仕立屋だ、それで満足しろ、というが、・・・ナラヤンは、それはとうさんの勝利だ」(AFB, pp.142-143)と納得しない。

その週には総選挙が行われ、政党による演説会があり、あらゆる約束がされるのだが、それらはすでに法律になっているが、現実には実行されていないことばかりである。そして投票の日が来て選挙管理委員の役人がやってくる。だが、その役人は投票が行われるときには地主の接待で飲み食いし、その間、投票者は黒いインクをつけた親指を投票の印に押すだけで実際の投票は地主の手下が行う。そして投票が終わったのち管理委員が戻ってきて、すべて公正に民主的に行われたと宣言するのである。時には地主どうしの間で違った候補を推す場合もあり、その時は、地主の手下どうしの間での闘いとなり、勝った方が投票所を支配することになる。こうしてより多くの投票所を支配下に置いた地主が候補者を当選させることができるという仕組みである。

ナラヤンはその選挙が終わったあとデューキに「次の選挙のときには自分で投票したい」というが、「やつらはそうはさせない・・・お前の振る舞いは何世紀もの深さをもった井戸にバケツを落とすようなもので井戸に落ちた時のシブキも音も聞こえないのだぞ」という。それでもナラヤンは、そうすることは俺の権利だ。次の選挙では俺は投票する。「尊厳のない人生は無意味だ」(AFB, p. 144)という。

それから二年後の州議会選挙のとき、ナラヤンは2年前にした約束を実行に移す。投票所でナラヤンは、勇気を振るって投票用紙を要求する。するとナラヤンの後に並んでいた二人の男たちもナラヤンの行動に勇気を得て同じことを要求する。すると10数人の男たちが表れる。彼らを率いていたのは地主のタクール・ダラムシであった。これは、16年前にナラヤンの結婚式の折、村の音楽隊に演奏しないよう圧力をかけた男であった。ダラムシは、ナラヤンの決意が固いのを知ると、力づくで親指に印をつけさせたあと、ナラヤンと、その同調者たち二人を自分の農場に連れてくるように命じる。

その日の夕方まで三人はバンヤンの木から逆さにつりさげられたまま棍棒で殴られ続け、男たちの小便を顔にかけられたのだ。そして村には緘口令が引かれ、このニュースが不可触民に漏れないようにされる。「投票箱が片付けられた後、焼けた石炭が彼らの性器に押し付けられ、次には口に押し込まれた。彼らの叫び声は唇と舌が溶けてしまうまで村中に聞こえた」。そして三人は、今度は首からつるされ、「その死体が村の広場に晒し物にされたのである」。そしてタクルは、ならず者たちを村の下層カーストの居住地に送りだし見せしめのために乱暴・狼藉を働かせたのである。そして最後にナラヤンの家族が報復を受ける。グラムシが最も憎んでいたのは、父親の方であった。「あいつの傲慢さによって我々が最も神聖だと見なしているものが汚され、・・・社会の永遠のバランスが歪められたのだ。カーストの境を超える行為は最も厳しい刑罰で報いらねばならない」(AFB, pp.146-147) といい、ナラヤンの無残な死体を家族の前に置いた後、家に放火し一家全員を生きたまま焼き殺したのである。

その知らせを聞いたイシバとアシュロフは、すぐさま警察に行き、被害届を出す。しかし、村に調査に行った警察は、事件そのものをもみ消し取り合わない。若く直情的なオムは怒り狂い復讐を誓うが年長で賢明なオムはそれをなだめる。

やがて新しいビジネスの波が彼らの町に打ち寄せる。安い既製服を売る店が出現し、仕立屋の仕事を奪っていったのである。そこでアシュロフは、「海辺の都市」で仕立屋をする知人を二人に紹介する。こうして二人の職人は都会に出て来ることになったのだ。ナラヤンの悲惨な死から1年後の1975年のことである。

ここには、インド北部の農村の独立前夜から独立後20年以上たった時代にかけての不可触民へのカースト的抑圧と、ナラヤンに代表されるカースト的境界を越えようとする不可触民の反抗とその悲惨な結末が描かれているのである。インドは独立後、カースト的抑圧の源泉でもあった地主制度(ザミンダール制度)¹⁶⁾を憲法改正によって廃止し、その後州レベルでの立法措置が進むが、現実の改革が地域によってはきわめて不徹底に終わり、地主階級が新しい制度のもとで国民会議派に参入し、権力の一部を形成し、権利意識を持ってそのような支配に反抗する者への抑圧が横行したのである。

「海辺の都市」でのスラムでの生活と非常事態宣言

こうして物語は、ナラヤンの兄のイシバとナラヤンの息子オムの物語へと展開する。そして、その舞台も農村から大都市へと変わる。この当時、都市部の発展とともに貧窮した農村部から仕事を求める人々の都市への人口移動が始まり、都市のスラムや路上生活者の群れが発生してゆくのだ。イシバとオムは、そのような人々の一部となり、インドラ・ガンジーによる非常事態宣言下の現実を生きて行くのである。

ネルーの死後、首相の地位を継いだ娘のインドラ・ガンジーは、1972年のパキスタンからの

バングラデッシュの独立を支持し、西パキスタン軍を敗走させることにより国民的な人気を得るが、その後、国内に噴出した分離独立問題や国内経済の運営を巡って野党や労働組合などの激しい攻勢に晒される。またインドラ・ガンジーは、1975年のアハラバード高裁判決で敗訴する。1971年の選挙で「不正」を行ったと訴えられていたのだが、この判決で国会議員として次の選挙に立候補することができなくなる。そうした政権を襲う危機的状況のなかでインドラ・ガンジーは、国家の安全が内部からの攻撃によって危機に瀕しているとして非常事態宣言を発し、憲法で保障された民主的権利を一時差し止め、野党や労働組合の活動家を一齐に投獄し、MISA（国家治安維持法）を発令し、令状なく警察が怪しいと思しき人間を逮捕できる権限を与え、自分に対する不利な裁判所の判決そのものを無効にし、権力の中樞の少数の人間の権限を強大なものにしたのだ。そのような権力の独占的体制のもとで、国民に対しては21カ条の政策を発表するとともに、同時に息子のサンジェイに強力な権限を与え、彼の持論である「都市の美化運動」、すなわち都市のスラムの一掃と、不妊手術の実施による人口抑制計画を強権的に押し進めたのである。¹⁷⁾

「海辺の都市」のモデルとなっているムンバイでは、地方から仕事を求めてやってくる人々の数が60年代に入ると急増し、職の争奪戦が激しくなるなかで、地元のマハラシューストラの住民の優遇を主張し、次第にヒンドゥー・ナショナリズム政党へと変貌してゆくシブ・セナ（Shiv Sena）が1966年に生まれ、勢力を伸ばす。¹⁸⁾ そのようなことを背景にして地域からやってきた人々が住むスラムが形成される。ミストリーは、イシバとオムの体験を通し、地方から都市にやってくる人々のスラムでの生活の典型的な例を描いているのである。

「海辺の都市」のスラム

二人が最初に体験したのは、アシュロフに紹介された仕立屋ナワズの冷たい態度と仕立屋の仕事を見つける困難であった。昼間は仕事を求めて街を歩き、夜はナワズの家を軒下を寝床にする生活が半年続いた後にディナの家での仕事が見つかったのだ。イシバとオムは、次には住む所を探さねばならない。ナワズが彼らを連れていったのは、「都市」の既存のスラムに道路越しに隣接する野原に新しく開発された小屋の集合体である。地べたの上にベニア板と薄い金属の壁で仕切りをし、その上にトタン屋根を敷いたシンプルな構造だ。それがずらりと列を成してならんでいる。このスラムを支配しているのは「スラムの主」と呼ばれる男で、ナワズによれば、「このあたりの全てを支配し、暴動が起きたときには誰の家が焼かれ、誰の家が焼かれずにすむのかを決める」（AFB, P. 162）男、つまりヤクザの親分である。

この新しいスラムは市の土地の上に建てられたものである。「スラムの主」のトクレイ（Thokray）は、市当局、警察、水道局監視官、電気会社の役員等を買収し、スラムに転用し、家賃を集め利益を得ているのである。つまり、住宅開発業者（＝ヤクザ）と市や警察との間に

は腐敗の構造があるのだ。¹⁹⁾

荷物を運びこんだ後、オムは共用の水道の蛇口をひねるが水がでない。それを見ていた近所のおばさんが、水は午前中しかでないことを教えてくれる。次の日の朝、蛇口には長い列ができていて、顔を洗い、歯を磨こうとした二人を近所の男が注意する。そんなことをしたら喧嘩になるというのだ。だからバケツで必要なだけ水を入れるのだ、といい、バケツを貸してくれる。そして、朝の用を足そうとすると、下水設備が無い為、排便は近くの電車の線路まで手を洗う柄杓をもって行き、男女が線路の両脇に分かれて並んで行くことを教えてくれる。

ここで描かれているのは、ガンジーが英国留学や南アでの生活で得た、またナイポールが先祖の祖国に向けた「外部者の視点」によるインドの現実であり、²⁰⁾ 水道や下水という都市に不可欠なインフラ整備の遅れに起因する習慣である。そしてそれには、腐敗の問題も絡んでいる。2012年に起こったインドの反腐敗抗議運動に対する中産階級の幅広い支持の背景に、未だにこの問題があるという記事を読んだ。例えば、家にまで水道管が来ないので水の販売業者から高い水を買わなくては行けない。実は、市職員が業者に買収され、水道工事を遅らせ住民が水を買わざるを得ないようにしている、という。²¹⁾ この例は、水を買うゆとりのある中産階級の住宅地域の場合であるが、スラムとなると、上記の土地の所有権の問題も絡み、かつまた農村での野外での排便という伝統的習慣に寄りかかり、下水整備という住民へのサービスが最小限に抑えられているのである。

その男が教えてくれたもう一つは、政府から配給カードをもらおうと安く食糧が買え、自炊できるというのだ。そこでイシバとオムは、政府の役所に配給カードをもらいに行く。しかし、担当の役人は瞑想中であり、いつ帰ってくるのかわからないという。しばらくして帰ってくると、その担当者は、二人が字を書けないと思ひこみ、配給カードの申込書を手渡ししながら、役所の建物の外で安い費用で書いてくれる専門家がいると指示する。二人が、字は書ける、と言ったとたん機嫌が悪くなる。しかし書きこまれた書類に目を通すうち優越感でにやりと笑う。字は書いてもへたくそだし、住所に問題があったのだ。役人は、法律では、スラムは住居として認められていないというのだ。ただし、国で進めている人口抑制「家族計画」に協力しパイプ・カットを承認すればただちに書類は認められるという。そして若いオムにまで不妊手術を示唆する役人にイシバは激怒して役所をでる。そこで二人が出会ったのが、便利屋である (facilitator)。便利屋によれば、非常事態が始まって以来、「家族計画」の推進について新しい規則ができたという。役人に人数の割り当てが課され、それをやりとげないと昇進できないというのだ。やつらだって辛いのだ、とその便利屋はいう。しかしイシバが、俺たちにしてみれば、そんなことをされたらたまらない、という、だから俺がいるのだ、と彼の役割を説明する。200 ルピー払えば好きな名義で6枚まで手に入れてやるというのだ。そんな金はとてもない、という、金ができたら来たらいい、俺はいつでもここにいるから、という。

つまり、地方から仕事を求めてやってきてスラムに住むことになった貧しい人々が、食糧配給カードを手に入れようとする、パイプ・カットをするか、法外な金を支払うかという選択しか残されていないのだ。一方は国家の事業として役人にノルマを与える形で行われ、他方は、便利屋のような怪しい連中の役人への買収を背景に存在しているのだ。さらに政府の役人の、教育を受けていないスラムの住民への馬鹿にしたような態度が描かれているのである。

彼らが新しい小屋の集合体に住み始めて2週間後には「スラムの親分」は新たな小屋を50も造り、それには一日で住み手が見つかり、住人の数が倍加する。そして溝からの悪臭が一日中たちこめ、道路越しの既存のスラムとなんら変わりがなくなってしまうのだ。そして朝の水の蛇口に並ぶ競争は暴動のような様相を帯びる。

やがてモンスーンが始まり、二人は夜になると屋根からの水漏りで一晩中悩まされ、初めて貰った給料でビニールのカバーを買い屋根に敷いてなんとかしのぐのである。

ディナの過去

イシバとオムのスラムでの生活を見てきたが、ここで彼らを雇用した側のディナの過去も簡単に見ておく必要がある。

作者のロヒントン・ミストリーはインドのなかのまったくの少数派に属する拝火教徒（パーシー）の生まれであり、主人公の一人、仕立屋を営むディナも拝火教徒（パーシー）という設定である。ディナは開業医の娘であった。父親のアシュロフ医師は、51歳になっても無医村に医師を送る運動の先頭に立つような、医師としての理想主義に燃える人であり、開業医としての生活から生活の安定と楽しみを求める家族や親戚からは困りもの扱いされていた。アシュロフには二人の子供があったが、長男のナスワンは父親のそのような理想主義とは無縁の人間で、16歳のときに自分は貿易関係のビジネスに進みたいと自分の意思を表明し、父親を密かに失望させていた。そうしたなかで、むしろ父親の血を引き継ぎ「父親のお気に入り」だったのは娘のディナの方であった。ディナは父の理想主義と大きな人生への野心を受け継ぎ、カソリック系の名門学校に通い、大学に進むことを当然と考える恵まれた少女時代を奔放に過ごすことができたのだ。ディナの人生は、そのような幼い時期に約束されたかに見えた輝かしい未来が裏切られてゆく人生ともいうことができよう。だが、ミストリーは「ディナ・ダラールは、自分の人生を振り返りながら後悔や苦々しい思いにふけることはほとんどなかった。・・・たとえそのようなまれな瞬間があろうと素早くそれを乗り越えたのだ」(p.14)と彼女の絶えず前向きな性格を強調している。まさに、ディナは、何度となく降りかかってくる苦境と闘い自分の本性に忠実に生きてきたのである。

ディナの人生を大きく左右した最初の大きな不運は、父親の突然の死であった。父親は、農村でのキャンペーンの最中コブラにかまれ命を落とした。そしてその後には何の財産も残さな

かったのだ。その結果、当時 12 歳のディナは、ビジネスの世界に入ったばかりで 11 歳年上の長男ナスワンの庇護のもとに置かれたのである。ナスワンは、世間体を何より重視する保守的なタイプの男で、パーシー社会の女性についての伝統的な枠組を、一家の家父長としての義務感からディナに押し付けようとしたのである。これが自我の自由を求め、奔放に生きようとするディナの反抗を招き、二人の間の長い間の激しい確執の種となったのだ。ディナは高校を中退させられ大学にゆく夢も破れ、ナスワンの家の家事を結局は押し付けられ、ナスワンが気に入った適齢期の青年たちとの結婚を勧められる。ディナは息詰まるような家から逃れるために図書館に通い、クラシックのレコードを聴くようになる。昔、父とともに一緒に聞いた西洋音楽の世界を思い出したからである。そうこうするうちディナは地元で行われる無料の定期コンサートの常連になり、おなじく常連の薬剤師のラストム・ダラル (Rustom Dalal) と出会い、愛し合い結婚する。こうしてディナはナスワンのくびきから自由になり、夫が賃貸契約を父の時代から交わしている家で新しい生活を始めるのだ。しかし、3 年後夫が事故死し、一人立ちできないディナは、再び一家を構えるナスワンの元に帰らざるを得なくなる。そのようなとき彼女を助けてくれたのが、亡き夫の叔母にあたるシリ (Shirin) であった。シリは夫の給料を補うために近所の人々の衣服の裁縫を請け負っていて、その仕事をディナにまわそうというのである。ディナは、生来得意であった裁縫の技術を生かし自宅で仕立て屋を始め、改めて自立の道を歩み始める。その過程で気の合う男性とも知り合いになるが、男女の関係の一線を越えようとすると今は亡き夫の記憶が蘇り、邪魔をし、再婚には至らなかったのだ。42 歳になり、目を悪くしたディナは、友人の助言で海外服飾ブランドからの注文生産を手掛けている繊維会社の下請け生産を行うことにする。その為には仕立て屋を二人雇う必要があった。そして収入を補うために下宿人を置くことにする。イシバとオムは雇い人として、マネックは下宿人としてディナの家に集合することになったのである。マネックは、ディナの学校時代の同級生の息子で大学に通うようになったのであるが、非常事態宣言下の大学で横行する理不尽な事態に耐えられなくなり下宿を探していたのである。

このようなディナのこれまでの半生を通じて彼女が何よりも大切にしてきたのが、経済的自立を通じた人格の自立と独立である。だが教育を途中で中断されていたディナの自立の基盤は決して磐石なものではなかった。仕事場でもある家と二人の雇い人のそのどちらかが崩れても、彼女は再びナスワンのもとに戻らなくてはならない。だが、彼女には人間として、女性として大切な自由と独立を守るために闘う強さがあり、決して運命に翻弄されるだけの犠牲者ではないのである。

ディナと職人たちの関係

こうしてディナの新しい生活が始まるが、二人の職人たちとの関係はどのようなものであったのか？職人たちは、最初の納期が訪れるまでは昼食も取らず出来高払いの仕事を必死にこなす。しかし、最初の納期に無事製品を会社に届け、仕事の出来を注文主のグプタ女史から褒められ、引き続き仕事を貰えることがわかり、最初の給料を手にした後から職人たちの扱いについてのディナの心労が初まるのであった。

職人たちは最初のようなペースでは仕事に取り組みず、きっちりと昼休みを取り、食事に近くのベジタリアン・レストランに出かけ、以前より頻繁に休憩を取り、家の内外でたばこを吸うようになる。ディナは、貿易会社のグプタ女史が、雇用人をあまやかし、なめられてはいけない、と言っていたのを思い出す。そこでディナは、厳しい声で納期に遅れるわよと注意する。やがてディナは、二人の職人のうちにやっかいなのはオムの方であるのを知る。若く、誇りが高く、直情的なオムは折あるごとに労働条件への不満をハッキリと口にだすようになる。そしてディナが納品する会社の名前を聞き出そうとさえする。ディナはオムの意図を察知し、次の日から彼らに渡す布地から会社の名前が知れるようなものを取り除く。こうしてディナは、やっかいな事態に直面する。雇い人が雇用者を出し抜こうとしているのだ。こうしてディナは、職人たちが、あてにならぬ電車の遅れなどで朝、遅れてやってくるたびに、もっと賃金のよい仕事を見つけたのではないかと不安に駆られ、職人たちがやってくるとホットするのだが、そうした不安に満ちた本心をおくびにも出さず不満顔で迎えるのだった。

ディナの心労の原因はもう一つあった。それは家主との関係である。職人を雇い自宅でビジネスを営むことは家主との契約違反であり、それを知られると退去を要求され恐れがあったのだ。そこで暗い奥の部屋にミシンを置き、外に面した窓から中が見えないようにしていたのだ。ある日、仕事場を明るい部屋に移してはとイシバが提案したことを切っ掛けに、ディナはそのような家主との事情を職人たちにも知らせ、職人たちもそれは理解したのである。

ある日、オムのディナへの不満とディナと家主との関係の二つが絡み合った事件が起き、オムの不満が爆発する。納期を翌日に控えたある日、ディナは朝食なしに仕事をしている職人たちに昼休みを取らず仕事をさせる。それに対しオムは、イシバに聞こえるように、いつもあんたは、ディナのいいなりだ、と不満をあらわにする。ディナは、会社に納品にでかけるとき、オムが以前言ったことを思い出し、後をつけてこられると困るので家に錠をかけてでかける。その事を知らない職人たちはソファで寛ぎながら煙草を吸う。オムにとっては、それは彼らを牛のようにこきつかうディナに自分たちの人間性を主張する反抗のポーズなのだ。するとそこに家賃集金人がやってきて、ドアに錠なんかかけたって俺はだまされないぞ、中で違法のビジネスをやっていることは分かっているのだ、と言い、家主からの分厚い通知をドアの隙間から入れてゆく。

それを聞いてオムは、ディナが家に鍵をかけて出かけたことを知り、俺たちのことを何だと思っているのだ、と怒る。イシバは、きっと何か理由があるのだ、といい、オムが家主からの通知を読もうとするのをやめさせる。やがてディナが帰ってきそうな時間となり、オムの不満が爆発する。オムは、ディナは会社と俺たちの労働の間にたち、自分は指一つ動かさず、俺たちから巻き上げているのだ、俺たちが会社と直接取引をすればいいんだ、ディナには、電気も水も何でもあるが、俺たちには何があるのだ、臭いスラムだ、俺たちは、村に帰るだけの金を貯める余裕もない、俺はディナの後をついて行って会社の所在地を見つけるぞと宣言する。それを聞いてイシバは、自分たちには仕事場としての家もないし、ディナのお陰で仕事ができるのだ、それに出来高払いだから頑張れば余裕もできる、と説得する。そしてこれが世の中の仕組みなのだと言及するが、逆にオムは、頑張れといいつつ、現状に我慢せよと矛盾したことを言っている。そしてイシバを責める。そしてディナが戻ってくるとオムは、「あんたは、俺たちが泥棒か何かだと思っているのか？留守の間に家財をもって逃げ出すとでも？」(AFB, p. 83)とつかかかる。

だが、ディナは、鍵がかかっていないと家主が彼女の留守の間にやってきてあなたたちを路上に追い出すこともできる、しかし鍵をかけておくと鍵を壊すことは違法なの、と説明する。イシバは納得し、新しい仕事を見せてくれという。そこでオムとイシバの間で一着ごとの手間賃をめぐる論争になる。オムは難しい仕事だからと高い値段をふっかけ、イシバはこれはこれまでより簡単だと言ひ、大丈夫説得するとディナに目配せする。ディナは二人のために約束していた紅茶をたて、イシバは満足そうにすすり、手をつけようとしないうムを誘う。オムも飲むには飲むが機嫌はなおらない。

数日後、集金人が再びやってきて先日届けた家主からの通知への返事を聞きにくる。その通知を読むと、契約違反のビジネスがディナの家で行われているので、ビジネスをやめるか、さもなくは立ち退けというものであった。ディナは嫌疑を頭から否定し、集金人を追い返した後、イシバに事情を話し、家を出入りする際に掃除や料理をしに来ていると口裏を合わせる約束を取り付ける。

だがオムは、これはディナの問題かもしれないが俺たちの問題じゃない、まともな賃金ももらっていないし、俺たちが明日死んだとしても、ディナは新しい職人を雇えばいいだけだ、と労使関係の観点でしか見ることができない。しかし、イシバは、よく考えて見るのだ、ディナが家から追い出されたら俺たちは働く場所を失うのだぞ、これはこの都市に来てから俺たちが見つけた最初のまともな職じゃないか、とディナとの利益の共同性を強調する。だが若いオムは、ディナのもとでの仕事に満足していないことを強調する。そして都市に来て以来の生活を振り返りながら、ここにきてから惨めなことばかりだ、いっそのこと焼かれた家族と一緒に死ねばよかった、というのだ。

こう見てくると、オムの不満や怒りは、農村から都会に来てスラムにしか住めず、低賃金で働かざるを得ない「持たざる者」としての怒り、不満、苛立ちであり、それがディナ一人にぶつけられているのだ。オムから見ればディナは恵まれた立場にあり、彼らを奴隷のように使い利益を絞り取る存在にしか見えないのである。だが、ディナの立場も危ういものである。借家住まいの未亡人で、自立した生き方を求め、二人の職人を雇い、下宿人まで置いて、かろうじて生計を立てているいわば小市民である。彼女の生計は家があって初めて維持されているのだが、それさえ彼女を立ち退かせようとする家主の前で危機に瀕しているのである。だが、若いオムには自分たちを搾取する厳しい雇用者としての側面しか見え、ましてやディナの人間性には思い至らないのである。

そしてある日、オムは自転車をレンタルで借りてくる。そして意図的に仕事に手に怪我をし、ディナが会社にタクシーで納品にでかけるときに、病院に行くといつわり、そのタクシーの後を自転車で追いかける。だがその途中で、先を争う車と車の間にはさまれオムは道路に投げ出される。幸い怪我はなく、車に乗っていた金持ちの男はやってきた警官を買収し、オムにも50ルピーの慰謝料を払い去ってゆく。

こうして計画は失敗するのだが、オムは海岸でしばらく時を過ごし、仕事場に帰ってくる。イシバはオムが何事もなかったかのように笑顔でミシンの前に座るのを見て、うまくいったのだ、と思う。他方、何時間も前に家に帰っていたディナは、ラーマヤナの物語を使って「ランカの南の果てまで行っていたのかい？」とオムを叱る。するとオムは、「そうさ、ハヌーマンに連れられて空を飛んでいったんだ」と冗談で返し、それにイシバも加わる。こうして思いがけず、いつも最も不愉快な時間帯が冗談と笑いで過ぎていったのだ。

そのあとイシバはオムから計画が失敗だったことを知る。だがオムは笑顔を浮かべ50ルピーを見せながらその午後の冒険について話し、聞いていたイシバは笑い始める。計画は失敗したが、二人ともそれにはがっかりしたわけではなかった。「お金が入ったからかも知れないし、あるいは、失敗したことにホットしたのかも知れない。会社を見つけていたら二人はやっかいな選択に直面したであろうから」(AFB, p.193)と作者は書いている。恐らく若いオムは都市に来てからの惨めな生活への失望と不満の全てをディナ一人にぶつけていたのであり、不満を行動に移すことで、気が済んだのであろう。この事件によって、これ以後二人は、ディナに代わって自分たちでビジネスを始めようという企てはあきらめ、ディナのもとで働く生活になじんでゆく。

こうして最初の一か月が過ぎ、マネックがディナの家合流する。しかし、マネックが到着した夜の次の日の朝、スラムに思いがけぬ事が起き、彼らは無断で仕事を休まざるを得なくなる。

インドラ・ガンジーの政治集会への強制動員

この朝オムは、マネックに会う為に早めにディナの家に行こうとイシバに提案する。しかし、スラムに警官隊を従えた国民会議派の活動家と大量のバスがやってきて、スラムの住民をインドラ・ガンジー首相を迎えての大政治集会に強制的に動員したのである。

最初活動家は参加者には5ルピーと軽食と紅茶が出されるというが、それだけではイシバやオムのように仕事を持っているものは参加しない。そこで活動家は、警察の力に頼る。警察は、各戸から2名ずつ出さないと、市の土地の不法占拠の罪で逮捕するというのである。こうしてイシバとオムも参加せざるを得なくなる。

これこそ、中央権力を支える政党、警察、地元のヤクザ等が一体となって無力なスラムの住民を政治的に利用するインダの権力政治の縮図である。そもそも市職員や警察を買収し市有地に小屋を建て、小屋を家賃を取って貸しつけているのは不動産屋＝ヤクザである。彼らを取り締りの対象になるのではなく、彼らに家賃を支払っている貧しい住民が脅かされ、動員されるのである。

彼らがバスで連れて行かれたのは、郊外の広い野原であり、周辺各地から動員された二万を超える人々が集められ、炎天下のもと、地元の政治家の演説が延々と続き、ヘリコプターでインドラ・ガンジーがやってくる。演壇では地元の政治家がインドラ首相に媚びへつらう。首相は、非常事態は、国家の安全を内部から転覆しようとする勢力と対抗し、民主主義を守るためのものだとし、国民の為の政治が強調される。最後のインドラの息子のサンジャイ・ガンジーがヘリコプターで表れるが、ヘリコプターの翼が巻き起こす風の為にインドラの巨大な看板が倒れ負傷者がでる。

イシバはディナの家に行き、仕事に行けなかった理由を話すつもりであったが、スラムで起きたある事件の為にそれもできなくなってしまう。

これまでディナやイシバは、非常事態宣言のことは知っていたが、それはガンジー首相と野党や労働組合、政治活動家との争い事であり、自分たちのような貧しい庶民とは関係のないことだと考えていたのだ。しかし、これ以後、非常事態宣言下の荒波を真っ向からこうむるのは彼ら自身であることを幾つかの大きな事件を通して知るのだ。だが、それについて説明する前にマネックの前史についても紹介しておこう。

マネックの前史

マネックもパーシーの生まれである。彼の家族は、北の高地(カシミール)の大金持ちであったが、財産の殆どを占める果樹園が、独立時の分割(パーティション)によってパキスタン領となってしまったため財産の大半を失い、残された雑貨店の経営で生計を立てる家族のもとで育つ。やがて美しい山々に囲まれた高地にも近代化・開発の波が押し寄せ、マネックもそれに

乗りつつ家業を近代化しようとするが、美しい自然を愛し、伝統的なやり方にこだわる父親はそれを許さず二人の間に対立が生まれる。高校を卒業したマネックは、時代の要請にマッチした空調技術の資格を取るために「海辺の都市」に大学生としてやってきて大学のユースホステルを住居とする。しかし、非常事態宣言のもとで大学から以前の自由な雰囲気が消えうせ、右翼が支配するようになる。そしてユースホステルでも進歩的學生運動に関わる學生が次々姿を消し、それに代わり右翼のヤクザまがいの連中が支配するに至る。マネック自身は、そのような社会の動向にはあまり関心がなく言わばノンポリ學生として傍観していたが、彼自身、右翼の連中の理不尽ないじめ行為の被害者となるにおよび、いたたまれなくなり、母の學生時代の同級生のディナの家を下宿することになったのである。しかしマネックは、短期間ではあったがユースホステルで知り合いになったアビナッシュという學生のことを忘れられなかった。アビナッシュは、マネックにチェスの手ほどきをし、非常事態宣言についても説明をしてくれたのだ。そして彼自身學生運動の先頭に立っていたのだが、彼も非常事態宣言が出されて以来、いつしか行方不明になっていたのである。

こうして自由にもものも言えない大学で、孤独な學生生活を送っていたマネックは、1カ月前、偶然ディナの家を下見に訪問した日に出会い、親しくなった職人たち、とりわけ同世代のオムとの再会を楽しみにしていたのだ。

マネックの合流と関係性の流動化

ディナと職人たちの世界にマネックが合流することによってそれまでのディナと職人たちとの関係に変化が訪れる。もしマネックがいなかったならば、ディナと職人たちの間の関係は、雇用者対被雇用者の平行線関係を超えることはできなかったかも知れない。だが、マネックには二つの点で平行線関係を流動化させる切っ掛けを与えることができたのだ。

第一に、マネックは、ディナと同じパーシー教徒であり、ディナの学校時代の友人の息子でもあり、ディナと同じ中産階級の世界に属していた。だから、ディナはマネックが、自分のこれまでの孤独な世界に新たな息吹を吹き込んでくれるのを期待していたのだ。

第二に、マネックはリベラルなパーシーの家風のなかで育ったのだ。もしマネックがヒンドゥーであれば、職人たちとの間にカーストの違いや階層の違いが大きく立ちはだかったかも知れない。だが、リベラルなパーシーの家に生まれた彼は、両親から分けへだてなく人と付き合うべきだという教育を受けていたのだ。そして大学で親しい友人を持てなかったマネックは、同年代のオムに新たな友人を見ていた。

こうしてマネックはディナと職人たちとの双方と関係をもち両者を近づけ得る存在だったのである。だが最初二つの壁がその前に現れる。一つは、ディナがマネックとは違い、兄のナズワンに代表される保守的なパーシーの家庭に育ち、それに抵抗して生きてきたとはいえ、頭の

片隅に階級意識がこびりついていたのだ。そしてマネックが職人たち、特にオムに急速に接近し、昼食時にいつも一緒に食事に近くのベジタリアン・レストランに行きだすと階級的な違いを理由にマネックにあまり職人たちにと親しくしないようにと注意する。だが、実はそれは必ずしもディナの本心ではなかった。実はディナはマネックがオムとばかり話すことで寂しさを覚えていたのだ。そしてディナがそれについて皮肉を言うまでになるとイシバが動く。イシバはある日の昼食時、仕事を済ませてしまう、という口実で仕事場に残る。するとディナはマネックの為に用意したカップでイシバの為に紅茶を入れる。こうして二人は様々なことを大人として話し、やがてそれが習慣となって行き、ディナはマネックがオムと一緒にいることにも小言を言わなくなる。イシバは「ディナは話し相手が欲しかったのではないか、という自分の予想の正しさが証明された気がする」のだ。(AFB, p. 277) こうしてマネックの合流によって、マネックとオム、ディナとイシバという対角線的関係が新たに生まれる。そしてマネックはオムと親しくなるにつれてオムの側からみたディナへの不満や過去の生活についても知るようになり、それをディナにも伝えるようになる。つまり新たなコミュニケーションの道がマネックのお陰でディナと職人の世界の間に生まれる。

だがマネックとオムとの関係には問題もあった。それが表面化するのが生理パッド事件である。ディナが商品の納品に会社に出かけると、オムは早速仕事をやめ、マネックを誘って遊び始め、マネックもそれに調子を合わせ、ディナが小さな布切れを利用して作り、しまっていた生理用パッドを探しだし、卑猥な悪ふざけをし、パッドが破れ布の小片で部屋がおおわれたときディナが帰ってくるのだ。それを見たディナは凍りつき、マネックに口をきかない。隣の部屋で仕事をしているイシバもでてきてオムを叱りつける。そしてマネックは次の日の朝、ディナに謝罪するのだ。

だが、次の展開ではマネックがディナを批判する。親しさをまじマネックのおごりで一緒に映画を観に行くことなどが重なったため、それに対するお礼として職人たちはマネックをスラムでの夕食に招いたのだ。するとディナは職人たちとの社会的地位の違いを持ち出し反対したのだ。しかし、マネックは、両親からだれとでもわけへだてなく付き合いという教育を受けていたため、それに抵抗し最後まで招待を受ける決意を貫くのだ。

こうしてリベラルな育ち方をしたマネックの動きを原動力としてそれに対するディナやイシバの動きが引き出され、ディナとイシバとの間の信頼関係が生まれたり、マネックとオムの軽薄な悪乗りが大人たちによって批判されたり、そして職人たちとの間に一線を引くディナのなかにある保守的な階級意識がマネックの平等意識と対置されたりするのである。こうして雇用者と被雇用者という平行線的・固定的関係を越えた人間としての関係性への兆しも見え始めるのである。だが、ディナと職人たちとの関係が大きく動き始める為には次の章での悲惨な出来事を待たなくてはならなかった。

次の章では、非常事態宣言下の専制的政治のもとで、職人たちがスラムでの住居を突然失い路上生活者となり、ディナが雇用者と被雇用者という枠を超えて職人たちに助けの手をさしのべざるを得なくなるのだ。そしてそれとともに、四人の關係に質的变化が生まれるのである。その過程を見て見よう。

路上生活者になる職人たち

ある日の夕方、突然ブルドーザーがやってきて彼らが住むスラムが一気に取り壊されてしまう。非常事態のもとで新たな法律ができ、小屋が不法なものなら都市の美化を口実に取り除くことができるようになったのだ。そのやり方は巧妙なもので、最初、政府の衛生検査官がやってきてスラムの検査をするという。住民は選挙のときに約束された居住区の改善—水道、便所、電気等の—の為の検査だと思ひこみ、居住地を空ける。すると突然ブルドーザーがやってきて小屋を次々と破壊し始めたのだという。そしてそのような理不尽な住居からの追い出しに抗議する住民を警察が抑える。今月分の家賃をすでに支払っている住民たちは「スラムの主」に抗議しようとするが、その当人がスラムの破壊作業の責任者を務め、手下のごろつきに守られているため近づけないという。そのうち作業が中止され30分の猶予が与えられ、その間に荷物を持ち去れという。そこで住居を失った住民の間で他人のものを盗もうとするものもあるなかで二人はトランクだけをかろうじて回収する。

スラム一掃実行使は、アルンダティ・ロイの「枷をはめられない権力は過剰な行為に及ぶ」²²⁾ (Location: 927 of 3888)という言葉を想起させる。だが、ロイのこの言葉は、21世紀に入ってからインド政府がダム開発において貧者を扱うその方法について言及されているのである。つまり、1975年の国家によるスラム一掃政策において発揮されたインド政府の貧者に対する強権振りは過去の物語では決してないのである。違いがあるとすれば、それは現在では政府の横暴への貧しい人々の抗議行動がより広範に広がっているという点であろうか。²³⁾

こうして二人は、新たな住居を探さないといけなくなる。とりあえずナワズの家を訪れるが、ナワズはもはやそこに住んでいない。近所の人話によると、商品を納品した顧客が支払いを拒否し、当局に訴えたところ、逆にナワズが刑務所に入れられたという。その顧客には有力者の後ろ盾があったのである。「非常事態」のもとでのMISAを利用し黒を白にすることも簡単になってしまったのだ。

そこで二人駅の構内で寝ようとする。しかしそこにはすでに多くの人が寝ている。やっこのことで寝場所を確保し寝ていると警官がやってきて「駅で寝るのは違法だ」という。他にも寝ている連中がいるじゃないかという、連中は特別の許可を得ているのだ、という。隣で寝ている老婆は二人に「警官にお金を払わなきゃいけないだよ」と説明するが、二人はそのような理不尽さに腹をたてそのまま寝入ってしまう。するとその警官が冷水の入ったバケツを持っ

てきて二人に浴びせかける。ずぶぬれになった二人は、プラットフォームの一番端の小便の臭いのする場所で夜を明かし、早朝に駅の売店のスナックで腹支度をし、驚くディナの前に姿を現したのだ。しかし、最初二人はホームレスになったことをディナに打ち明けることができない。「ホームレスの人間は怖がられる」と思ったからだ。しかし、結局事情を打ち明けざるを得なくなる。

こうしてディナも、ホームレスとなった職人たちに雇用者として、また人間として直面することになる。ディナは、一週間前にグプタ女史が政府のスラム取り壊し提案を称賛していたのを思い出す。しかし身近なイシバやオムがその犠牲者となったことを知り、二人をかわいそうに思う。しかしマネックが、職人たちをディナの家のベランダに泊めてやればいいと言いだそうとすると、ディナは眉をひそめ彼を制する。そしてディナのベランダに少しの間泊めてくれないかというイシバの頼みを断る。その理由は、家賃の集金人がそれを見るとディナが不法に下宿屋をしていると見なす口実を与えることになり、全員が路上生活の身になるかも知れないからだ。そしてイシバのプライドはそれ以上頼むことを許さなかったのだ。だが、ディナが職人にベランダを貸すのを断ったのにはもう一つの理由があった。二人が出て行ったあとのマネックとの会話から、少しでも物を敷地に預かれば、職人たちが居住権を主張する根拠になり、裁判沙汰にでもなれば、何年も解決に費やすことになる、イシバやオムがそんなつもりとは言わないが、悪知恵をさずける連中が周りにでてこないとは限らない、というのだ。だがマネックが、この町には彼らの身よりなど誰ひとりいないのだ、というとディナの顔を心配の影がよぎる。

こう見てくると、ディナが職人たちに手を差し伸べるのに躊躇する大きな理由にディナが職人たちの人間性を信じきれないことがあるのがわかる。しかし、実はそれは相互的でもある。ホームレスになったことを最初打ち明けられなかったのは、その為に仕事を首になることを恐れたからだ。つまり、雇用、被雇用関係とは別次元での人間どうしとしての信頼関係がまだお互いの間に十分には存在していないのだ。

路上で寝る人ひと

ミストリーは次に、スラム一掃作戦によって家を失った人々は1体どうするのかを描いて行く。

二人はホテルを最初当たるが高くてとても無理なのを知る。そこで目に入ってきたのは、夜間路上で寝る人々の姿である。屋根がありそうな場所はどこもかしこも誰かによって占拠されている。そしてうっかり誰かの寝場所に寝たりすると殺されることもあるのだ。

やがて二人は、24時間営業の薬局の前に来る。その軒先には守衛がいてベンチを置いて座り、薬局と隣の店を夜間守っているのだ。話かけるとその守衛は、一定の料金を支払えば二人が店

の軒先で寝てもよいという。

こうして職人たちは、その晩初めて路上で寝る。だが、薬局の軒先には深夜にもかかわらず客が頻繁に訪れ彼らの安眠を妨げる。悪いミルクが売られ、赤痢が発生していたのだ。そして次の日、彼らは目に隈をつくりふらふらの状態でやってきて、仕事がかどらない。ディナは二人の健康と注文の締め切りが気になる。二つはワンセットなのだ。その日の夕方オムが重いトランクを持ち上げる姿を見てディナはもう少しで、仕事場において行きなさいと言いかけてがまんする。ディナの心の葛藤を見ていたマネックは、オムの荷物を自分もがつ。ディナはそれを見てホットするが、マネックが自分に声もかけずに出て行ったことで傷つく。私が、冷たい人間見たいじゃないと思ったのである。

こうしてイシバとオムの路上生活の二日目が始まる。夕闇が訪れると段ボール、新聞、プラスチック、毛布を持った人々が職人たちの周囲の空間を占め始め、またたくうちに空いた場所が無くなってしまう。守衛はこんな状態も毎日見ていると慣れてしまって気づかなくなる、それしか生きるすべが無い場合は特にね、という。(実は、私が、2009年にムンバイを訪れた際に滞在した繁華街のホテルのすぐ近くの道路わきの歩道に夜間、子供を含めた沢山の人が毛布を体にまとい身を寄せ合って座りこんでいる光景を見た。その時はよく事情が呑み込めなかったが、この小説を読んでその意味が理解できたのである)。

ディナの葛藤と最初の心の通い合い

こうして職人たちは一応の寝場所を確保するのだが、問題は、二人のトランクである。オムは三日間重いトランクを寝場所から仕事場まで運ばねばならず、そのために彼の華奢な腕は悲鳴をあげていたのだ。それを見かねたディナは、思わずバーム軟膏をオムの腕に塗りこんでやる。その後、何かを取ろうとして台所に行き、棚の上に手を伸ばすと積み上げてあったものが音をたてて崩れ落ちる。物音を聞きイシバとオムが駆け付ける。ディナは、オムの表情にも心配の表情が浮かんでいるのを見て心がなごむ。彼女が棚から取ろうとしたのは蠟紙だった。ディナはそれに軟膏を包んでオムに持って帰らそうとしていたのだ。忘れないで持ってかえりなさい、というディナの言葉に思わずオムの顔にわずかながら感謝の気持ちが表れる。これがディナの心を溶かしたのだ。そして夕方二人が去ろうとしたときにディナは、トランクを寝場所に置いておくことはできないのかと尋ね、置き場がない、という返事を聞くと、さりげなく、ここに置いておけばいいじゃない、という。それを聞いてイシバは大喜びし、オムも出て行く時小さな声で「ありがとう」という。オムへのディナの思いやりの行為がオムのディナに対し閉じられた心の扉をほんの少し押し広げる瞬間である。そしてイシバは、二人だけになったとき、この小さな行為に見られるディナの人間性にオムの注意を向けようとする。

だがこれはまだディナとオムとの間の信頼関係の第一歩にすぎないし、ディナもこの段階で

は職人たちにベランダを提供するという考えはない。彼らには路上とは言え、まだ寝場所があったからだ。ところが職人たちの路上の寝場所さえ奪われる事態が起きるのだ。

路上生活者一掃作戦の犠牲者となる職人たち

薬局の店先で眠り、毎朝仕事場に向かうという生活が定着したかと思われたある晩、突然警察のトラックがやってきて路上生活者たちを一斉にトラックに乗せ始める。店先でそれを眺めていたイシバとオムも、ノルマに二人足りないという理由で巻き添えにされる。イシバは、自分たちには次の日仕事があると訴えるが警官は聞く耳をもたない。驚いたことにはその現場に役所の前で配給カードの手配をしていた便利屋がいて、運び去る路上生活者の人数やその特徴を記録していることだ。

シャンカーの語る乞食の世界

トラックのなかには顔見知りの乞食シャンカーもいた。職人たちと同様間違っただけで連行されたのである。シャンカーは太ももの付け根から足が無く、手の指もなくて、車輪をつけた台座に乗って物乞いをしている。二人は行きつけのベジタリアン・レストランの近くで物乞いをしているシャンカーに小銭を恵むことはあっても、面と向かって話したことはなかった。いわば別世界の人間だったのだ。だが、シャンカーは心の不安を追い払おうとして顔見知りの職人に自分のことを必死に語り始める。それはシャンカーから見た乞食の世界である。シャンカーの言うには、物心ついたころから足の無かったシャンカーが生きてこられたのはベガー・マスターのお陰である。ベガー・マスターは大勢の街の乞食の大元締めであり、彼らの生活を保証する代わりに彼らに稼がせている。ベガー・マスターは警察に金を渡し、乞食をする場所を確保し、物乞いの際に逮捕されないように守ってくれるのである。稼いだ金を盗もうとする連中から守ってくれるのもベガー・マスターである。シャンカーは物心ついたころからベガー・マスターのもとで物乞いの仕事をしてきたのだ。小さい頃にはペットのようによくレンタルされ、借り主によく扱われ幸せな日々を送ることができたという。それも、借主の面倒見が悪いとベガー・マスターが怒り、借り主とのビジネスを断ったためである。そのうち体が大きくなり、一人で台座に乗って物乞いするようになると、ベガー・マスターは、物乞いのテクニックをしっかりと叩き込んだという。様々な乞食を抱えているベガー・マスターは、どのような乞食が人々の同情を喚起するのかを研究し、乞食たちの体の障害の多様化を図っているという。ただ眼が見えないだけでなく、眼球が欠けていればより多くの同情と恵みを得られる、と言った具合である。つまり人口的に障害を作り出すのである。(映画版の *Slum Dog Millionaire* には、そのような目的の為に、熱く熱した鉛を少年の目に垂らしこみ片目を潰すという、思わず目を背けてしまうような残酷な場面があるが、そのような世界が本当に存在するのであろう)。後にわ

かるように、シャンカー自身、物心つく前にベガー・マスターによって手足を切り取られていたのである。

労働キャンプ

彼らが連れて行かれたのは郊外の灌漑工事の現場であった。ここで彼らは、無報酬で奴隷のごとくに肉体労働を強制されるのだ。その仕組みはこうである。警察による路上生活者の一掃作戦は、非常事態宣言下の政府による都市美化運動の一環であり、それを建設会社は、安価な労働力を手に入れる好機ととらえ、警察が逮捕した路上生活者を工事現場に運ばせ、その代償として警察に人数に応じ金を支払っていたのだ。便利屋は、建設会社に雇われ警察との間に立つ仲介人であり、注文しただけの数の労働者がトラックに載せられたかどうか、どのような特徴をもった労働者なのか記録していたのである。そこには路上生活者の人権などという観念は存在しない。現場の監督官に「俺たちがどんな罪を犯したためにこんな罰を受けるというのだ」と叫ぶイシバに監督は、「お前の言葉の使いかたは間違っている。あるのは問題とその解決だけなのだ」(AFB, p.338)と言う。つまり罪を犯す「主体・人間」としてではなく、「問題」、つまり「もの」として彼らは捉えられているのだ。

そしてその労働キャンプでイシバとオムはそれまで経験のない肉体労働を強いられる。ある日、めまいを感じ小屋に戻ってきたイシバをシャンカーは、優しく看護し、イシバの心を動かす。シャンカーの優しさはイシバだけに発揮されたのではない。負傷のために運びこまれてくる人が増えるに従って、シャンカーは怪我をした人々の食事の世話や看護を献身的に行い、感謝されることに生きがいを見出して行く。

他方、慣れない工事現場の仕事をさせられた路上生活者の間で負傷者が増え、人手が足りなくなると現場の親方は再び一時解雇された賃労働者を増強しようとする。それを見て、その労働者は無償で働く路上生活者や乞食たちがいなくなれば、自分たちの雇用問題は解決できると考え、彼らに敵意をあらわにし、故意に事故を増大させ、シャンカーに仕事を提供することになる。すると現場の責任者は、警備係を増やし、作業場は軍隊の野営地さながらとなる。

そして次に便利屋が路上生活者をトラックに乗せて連れて来ると、現場の親方は不満を露わにする。お前に金を払ったが、怪我人や足の悪い人間が多く、費用ばかりかかり元がとれないと。するとそれから2週間後、便利屋は、労働力不足を解消してくれるという男を連れて戻ってくる。そしてその男が事故による負傷者のテントを訪れたときシャンカーは大声を上げる。それはベガー・マスターだったのだ。ベガー・マスターは、路上生活者に交じって連れ去られた自分の乞食たちを取り戻しにやってきたのである。そしてシャンカーの口添えもあり、イシバとオムも一緒に帰ることが可能となったのだ。ただし、ベガー・マスターは、毎週一人あたり50ルピーを1年間支払うならば、という条件をつけた。それは3日間の労働の報酬に値す

る金額であるが、二人はそれにしぶしぶ同意する。

ここに描かれている非常事態宣言下で行われた路上生活者狩りとその無償の労働者としての利用は、憲法上の人権や民主主義が留保された特殊な期間に起きたこととはいえ、独立後のインドの最大の問題の一つである国家による貧しく無力な人々の人権蹂躪を示す出来事である。(スラムの強制撤去の際にも触れたように貧しく無力な人々への権力や大企業の人権無視の横暴は、現代インドの大問題の一つであり、90年代末から2000年代に入り、ダム建設や工業資源開発等の問題を巡り土地を失うことになる貧しい人々の抵抗運動がNGOやアルンダティ・ロイ (Arundhati Roy) のような世界的に著名な作家の支援や援助も受けながら注目を浴びるようになっている)。

シャンカーの意味

この事件のなかでもう一つ重要な点は、職人たちが、シャンカーの醜い外観の内側には傷ついた自分を助けてくれる温かい心があり、限られた条件のなかでも人の為に何かできることに生きがいを求めている姿を見たことである。これは、後にイシバとオムがシャンカーと同じような境遇に陥ったときに、それに絶望するのではなく、立ち向かう力の源泉となるのだ。

同じ旗のもとで

労働キャンプでの辛い体験の後、ベガー・マスターに連れられて深夜ディナの家に戻ったイシバとオムは、思いがけなくディナに温かく迎えられる。ディナは戸の向こうに二人の職人を確認するとさっと戸を大きく開け、「あなたたちだったの！どこに行っていたの、何か起こったの！」(AFB, p.374) と叫ぶ。それは心から湧きおこってきた感情を素直に表現した言葉であった。突然職人を失い途方に暮れ、家賃の支払いをするためマネックを伴って兄の家を訪れ、兄から借金までしたディナにとって職人が無事戻ってきたことにホットしたのはもちろんである。だがそれだけではなかった。彼らの身の上についても心配していたのだ。それはディナにとっても意外であった。そして自分が二人の帰還に賭け値なしに喜びを感じることができたことが嬉しくもあったのである。そしてこれまでどうしていたのか矢継ぎ早に聞き、イシバとオムも支離滅裂になりながら自分たちが被ってきた酷い扱いをディナに訴えようとしたのである。この瞬間、ディナは、雇用主としての立場や社会的な地位の違いという観念の垣根を飛び越え、人間対人間として二人の職人に向かい、これまでの心配や無事を喜ぶ気持ちを素直に表現したのである。そしてそれに二人の職人も同じ気持ちで呼応する。

そしてディナは次に、それまで超えられなかった1線を超える。職人たちに自分の家のベランダを寝場所としてその晩提供したのだ。すると今度はイシバが感情を押さえられなくなり、跪いてディナの足に接吻し、感謝の気持ちを表そうとするが、あわててディナがそれを制する。

同じ人間に対しそのようなことは決してしてはいけないと彼女は言ったのだ。そのディナの言葉は、パーティションの際に命を助けられたアシュロフの妻のムンタズが職人たちの足に接吻しようとしたときにイシバが言ったのと同じことであった。つまりイシバもディナも理不尽な目に会った人間に助けの手を差し伸べることを同じ人間として当然のことと見なす価値観を共有していたのである。

しかし、ディナにはもう一つ頭を悩ます問題があった。一方で、ディナは二人が路上で寝ることによって「再び警察に連れ去られる危険を冒すことはできなかった」(AFB, p.382)。とは言え、他方、自分の家のベランダを彼らの寝場所に無条件で提供することはできない。というのは、彼らにベランダの使用を許し、もし、彼らがそこに居住権の主張をし始めれば、やっかないことにもなりかねないからだ。従って、どういう言い方で、あるいは条件でベランダを寝場所として提供するのか、という問題があったのだ。しかし解決は以外と簡単に彼女の口からでてくる。次の日の夕暮、仕事が終わわり、これから寝場所を探さねばならず、重い心で立ち去ろうとする職人たちにディナは、「夕食が終わったら戻ってきたいわ・・・」といい、「ということは?」「ベランダで・・・?」と口ごもる。ディナは、「住む所を見つけるまでね」(AFB, p.379)、あなたたちが警察に連れていかれたら困るもの、そして家賃はいらぬ、と自然な会話の流れのなかで過不足のない中性的な表現で二人に条件を提示したのだ。そして、家賃の集金人に気づかれない為に、できるだけ家の出入りを減らすように言う。朝、駅に行って顔を洗ったり用を足したりするのではなく、この家のトイレと水道を使えばいいという。マネックがどうして家賃を取らないのか」(AFB, p.380)、と聞くと、ディナは、家賃を取れば、ベランダを人に貸していることになり、契約違反のかどで家主に追い出す口実を与えるのよ、という。

こうして、ディナは、職人たちとの共同生活を、彼らへの善意と自分の利益が一致するウィンウィンの形で設定したのである。

だが、イシバは自分たちが「ディナの善意に付け込み過ぎている」と感じ「あまりに申し訳ない」という。それを聞いて、ディナは、自分の親切の背後にある自己保身や利益への計算を意識し、自分が二人から善意の塊のように言われるのが逆につらかった。だから、イシバはお返しに何かできることはないか、と聞くのだが、ディナは何も言い出さない。するとイシバは自分から先手を打って、自主的に家の掃除をする。するとディナも、掃除を終えた二人に来客用のカップでお茶をふるまい、オムの心を動かす。こうしてディナの善意と、それに対する職人たちの感謝によって四人の生活は首尾よく始まる。

だが、共同生活を円滑に進める上で、背景が違うところばかりの4人が一緒に住むのであるから、生理的なレベルで受け付けられない互いの習慣を話し合いで解決する課題が浮上する。それは、イシバの毎朝洗顔時に口のなかに指をつっこみ胃液を吐き出す習慣であり、オムが髪の毛にわいたノミのために頻繁に頭を掻く習慣であり、そしてオムの腸に住まう虫の駆除であった。

それらの問題を共同生活上の問題として話し合い、解決していったのである。また、ディナやマネックがイシバたちから学ぶこともあった。イシバたちは昔から墨の歯磨き粉を使っているのだが、比べて見るとイシバたちの歯の方が自分たちの歯より良いことを知り、自分たちも墨の歯磨粉に変えたのである。

次の段階は、四人が食事を共にすることになったことである。きっかけは、オムの頭の虱をインドの民間療法で退治したことである。ディナは辛い治療をがまんしてやりとげたオムへの褒美として夕食を振る舞おうと考えたのだ。しかしディナには同じテーブルで食事を共にするという考えは浮かんでこなかったのだ。善意が相手への侮辱になる事態を防いだのは、人をわけへだてなく扱うよう教えられてきたマネックである。マネックは、それは仕立屋への侮辱だ、ポーチで食事をするのは犬だけだ、とディナの態度を批判し、ディナは譲歩したのだ。

四人分の食事をテーブルに並べながら、ディナはそれが、20年以上前の結婚三周年目に兄の家族とともに食事をした日以来のことだと気づく。仕立屋が食堂に招きいられると彼らの表情から、「これを大きな名誉だと考えていることがありありとわかった」。(AFB, p.395) 食事が始まると、ディナはイシバとオムがナイフとフォークを前にしてもじもじしているのに気づき、指を使って食べ始める。そしてマネックも後に続く。こうして四人は食事を楽しむことができたのだ。

だが、四人が食事を共にするのはこの日だけにとどまらなかった。別々に食事をする調理場の無い職人たちはレストランで食事をしなくてはならず、ディナも高いパンを買うことになる。ディナは、長い独身生活のなかでそれまで食べていたチャパティを焼く習慣を無くしていたからだ。だが、話合いの結果、ディナの配給カードで小麦を買い、オムがチャパティを焼けば、食事にかかる費用をお互い大きく削減できるというアイデアに辿り着いたのだ。これはベガー・マスターに毎週多額の金を納めねばならない職人には大いに助かることだし、ディナにとっても食事のたびに職人が外に出ることによって家主につけいらせる危険を減らすこともでき、おまけに焼き立てのチャパティが食べられるのだ。そして、この計画がうまくいくかどうか、1週間やってみようということの話がまとまるのだ。そしてオムは得意のチャパティづくり役を買って出る。(AFB, p.396) つまり、一人の善意に乗り掛るのではなく、金銭的負担の平等と食事の用意における合理的分業を基礎に、お互いの持ち味を生かす形で一緒に食事を用意することになったのだ。

次の日、ディナと職人たちは、小麦の買い出しにでかける。そして、夕食時にはオムが焼いたチャパティが皆の称賛を得、瞬く間に無くなってしまう。

ある日、ディナは、それまで仕立屋たちの気になっていた小便の臭が今ではまったく気にならないのに気づく。そして、それが今では皆が同じものを食べ、同じ水を飲んでいるからだ、「一つの旗のもとに航海している」(AFB, p.399) からだ、と気づくのであった。

次には、食事の分担作業がさらに進化する。ある日、イシバが自分の得意なマサラ・ワータを作ると言いだし、ディナは休んでいてくれという。ディナはそのおいしそうな匂いを嗅ぎながら、ディナは「何て違いなの」と最初の頃のギクシャクした関係を思い出す。そしてディナは、あなたたちこんなに料理が上手なら仕立屋じゃなくて料理人として雇ったのに、という。イシバは、「ごめんなさい、俺たちは金の為には料理しない、自分たちと友人の為だけだ」(AFB, p.400)という。それを聞いてディナは、それまでも感じてきた罪悪感につきあたる。彼らが自分を見るようには、自分は彼らを見ていないからだ。

それ以来、仕立屋たちは料理のレパートリーをどんどん増やし続け、夕食時キッチンにはいつも4人か少なくとも2人がいることになる。「私の最悪の時間が最も幸せな時間になった」(AFB, p. 400)とディナは思うのだ。

このような日が続くうち、次第に、ディナは職人たちの不可触民であった時代の生活についてもイシバから聞くことになる。ある日、イシバがコメを洗い、交じっている小石をよりわけながら、村に住んでいた幼い頃、母親の為によくこんなことをやったものだ、と言っても、これとは逆のことだけだね、という。つまり、コメの収穫が終わったあとの畑に落ちているお米を拾った思い出を語り始める。その頃は、今とは逆で、とがった石ころの間から米粒を発見できれば幸運だった、という。その後はどうなったの？とディナが聞くと、そのうち違った道があり、違った歩き方があるのだと分かった、というのだ。

他方、オムはマネックにナイフとフォークの使い方を教えてくれといい、マネックは快く応じる。こうして四人の協同生活のなかで、キルトのようにそれぞれの違いが寄り集まり、一枚の布が作られて行く。そしてそれに合わせるかのように、ディナは仕事が順調に進み始めるに従って集まって行く布の切れ端を集め、キルトを再び作り始める。まったく相互に関係のない切れ端をねばりよく縫いあわせ、最後に一つにすると素晴らしいものができるのだ、とイシバはいう。

だが、四人の共同生活を根底から脅かす事件が起きる。以前からディナを立ち退かせようと圧力をかけていた家主がいよいよ実力行使に入ったのだ。表面的には、ディナが借家でビジネスを行っているという理由であるが、実はそれは口実で、本当の理由は、昔からの安い家賃で住んでいるディナを追い出し、跡地に高級アパートを建てることである。ある晩、ヤクザのような二人の男たちが集金人と共に訪れ、抵抗する職人たちやマネックに暴力を振り家具や商品を破壊する。こうして四人の共同生活は危機に瀕する。だが、そこに思いがけない助けの手が差し伸べられる。ベガー・マスターである。集金に訪れたベガー・マスターは、イシバが、もうこれ以上保護費を支払えないと事情を打ち明けると、二日後には、家主にかけあい、家主から二人のごろつきが与えた損害への賠償金を取ってきたのだ。そして暴力を振るった男たちにも制裁が加えられたという。こうして4人の共同生活は、乞食の頭目の暴力によって守られる

という皮肉な展開を取る。

だが、そのような展開からディナは次の二つの出来事を体験することになり、イシバとオムを襲うことになる理不尽きわまりない出来事に知らずして備えることになる。二つの出来事とはシャンカーと自分との関係についてのベガー・マスターの告白とシャンカーの葬儀への参加である。それぞれの出来事によってディナがどのように変わってゆくのかに注目しながら展開を追って見よう。

ベガー・マスターの告白

ある日、ベガー・マスターが集金にやってきて、思いがけない話をし始める。実はシャンカーはベガー・マスターの父親がノージーという乞食の女に産ませた子供で自分の腹違いの弟だというのだ。ノージーは、生まれた時に女の子だと知り怒った父親に鼻を削がれ醜い顔にされた乞食である。そのノージーが路上で死を迎えたとき、ベガー・マスターに、シャンカーが自分の子供であること、そして、その相手の男がベガー・マスターの父親でもあり、従って、シャンカーはベガー・マスターの義理の弟なのだと言ったのだ。ベガー・マスターは、最初それを信じなかったが、ノージーは、家族以外に誰も知らない彼の父親の身体的特徴を語る。しかしベガー・マスターは、それは単に酔った勢いで抱いただけのことだ、と主張する。それに対し、ノージーは、ベガー・マスターの父親は最初路上で寝ていた彼女を酒の勢いで抱いたのだが、それから回を重ね、しかも素面の時にも彼女の顔をみつめながら抱いたというのだ。そして、その区別をノージーは人生の最大の宝にしてきた、という話を聞いて信じたという。ベガー・マスターの心には複雑な思いが渦巻いたが、今や天涯孤独の身の上であって、兄弟がいることを知ったのは喜びでもあり、ノージーへの怒りや恨みの気持ちに代わり、感謝の気持ちが湧いてきたという。ベガー・マスターは、死期の迫ったノージーを病院に連れてゆくが、医師に診てもらう前に彼女は息を引き取ったという。

ベガー・マスターは、このことをシャンカーに打ち明けたい気持ちに駆られながらも、その前に打ち明けてからどうするのか、を決める必要があると考えた。何もせずともよい楽な暮らしをさせることは簡単なことだ。だが、今なら路上で彼の障害が役に立つのに、それがただ目立つだけの、目的の欠けた生活をして果たして幸せだろうか、と考え迷うのだ。だが、それ以上に彼の心を悩ませたのは、幼い頃に、母親から引き離され、乞食として生きて行くために自分によって今のような体にされたことをどう受け止めるだろうか、という点だった。シャンカーは、すでに幼いときに手足がないという悲惨な運命を引き受け生き抜いて行くことができていた。その彼に、いまさら実は手足を奪ったのはベガー・マスターであり、そしてそのベガー・マスターが実は自分の兄であったことを知らせ、更なる精神的打撃を与えることはあまりに自分本位な考えかも知れないと、思い悩み、打ち明けることができなかったのだ。そこでベガー・

マスターは、せめてシャンカーの乞食としての今の生活をできるだけ幸せなものにしてやろうと決めたのだった。

そしてベガー・マスターは前日の夜眠られぬままに書いた三枚の絵を見せる。シャンカーとノージーとそして自分の絵である。三人の注目をとりわけ引いたのは三枚目である。それは、クモのような足をしたベガー・マスターの姿であり、四本の足はそれぞれ別の方向に向かおうとし、その手首には、お金の入ったバッグが手錠で繋がれ、そしてその顔には二つの鼻がついていて「どちらも相手の匂いが耐えられないとばかりにそっぽを向いている」(AFB, p.452)のだ。ここには金の為には残酷な行為をもいとわない冷酷な心と、ベガー・マスターの父親が素面で彼女の顔を見ながら抱いてくれたことを人生の宝にして生きているというノージーの話信じ、シャンカーに自分が兄であることを打ち明けた後のシャンカーの生活に思いを馳せ、打ち明けるべきかどうか思い悩む人間的で繊細な心とが相争っている心の内が描かれている。

ディナやイシバたちは、そのようなベガー・マスターの複雑な心の内を垣間見ることによって一見別世界の人間に自分たちとも相通じる人間味を垣間見るのである。

そしてベガー・マスターはある日、シャンカーに理髪のサービスを受けさせようと思いつく。だが、それは彼の善意に反し、一連の経過を経てシャンカーの悲惨な交通事故死に終わってしまう。

シャンカーの葬儀

シャンカーの死とその葬儀にディナとマネックが参加する場面は、シャンカーに寄せるベガー・マスターの隠された人間味をさらに照らし出すとともに、ディナやマネックがいかにか中産階級の常識の世界から踏み出してきたのかを明らかにする。だがそれだけではない、ディナとマネックとの間にある違いも対照的に示唆し、物語のエピローグでのディナとマネックの、変わり果てた姿となった二人の職人への態度の違いへの伏線となっているのだ。物語の展開に沿いながら様々な場面に散りばめられている作家のメッセージを読み説いて行こう。

ベガー・マスターがシャンカーの死を知らせにイシバとオムを訪れる。しかし二人はすでに故郷の町でのオムの結婚式の為に出発していた。話はそこで終わってもよかったのだが、そうはならずマネックとディナが二人に代わってシャンカーの葬儀に参加することになる。客観的には乞食のシャンカーと中産階級のマネックやディナとの間には階級的・宗教的な違いが横たわっていて、それを超えるのは容易なことではないはずだからだ。ではどのようにして二人は葬儀に参加することになったのか？

マネックはシャンカーが死んだという知らせを信じられない思いで聞く。前の日に話したところだったのだ。ベガー・マスターはシャンカーが、台座をコントロールできなくなり道に飛び出し、やって来た二階建バスに轢かれ、木の台座と体が混じり合って引き離せない形で死ん

だことを話、泣き崩れ、シャンカーに自分が兄であることを打ち明けなかったことを悔やむ。

それを聞いたマネックはイシバとオムから、シャンカーが工事現場で怪我をしたイシバを看護してくれたことを聞いていたこと、そして少しも普通の人と変わらず、冗談さえいような人だったとシャンカーの思い出を語る。ディナも、シャンカーの為に職人がベストの贈り物をしたときシャンカーのサイズや体の特徴を聞き特別仕立てのベストをデザインした為に、他人とは思えなかったのだ。それを聞いてベガー・マスターは感謝の涙を浮かべる。そして明日の葬儀に職人たちを招く為に来たという。シャンカーに取って二人は唯一の友人だったからだ。するとマネックは、僕は葬儀に参加する、といいディナを驚かせる。ディナの心のなかに、マネックが職人たちからスラムでの夕食に招かれたときそれを止めようとしたのと同じ、社会的な地位の違いの感覚が再び顔を出すのだ。また、ディナは、マネックがベガー・マスターのような怖い人間とこれ以上親しくなることに賛成できなかったのだ。だが、マネックは断固として意思を翻さない。そこでディナは自分も葬儀に参加し、マネックを見守ることにする。

こう読むと、二人がシャンカーの死を他人事とは思えなかったのは、シャンカーが今は生活を共にする職人たちの友人だったからだ。だが、葬儀への参加という社会的行為に踏み込むにはディナにはマネックの後押しが必要だったのだ。だが、ディナは、一端一線を超えるとマネック以上に先に進む力を持っていることが次第に明らかとなる。

参列した二人を見てベガー・マスターは、旅立った職人たちに代わってディナとマネックが参加してくれることに感謝しつつ、ある意味では二日前に旅立ったことはかえってよかった、何故なら悲しみがオムの結婚式をだいなしにしたかも知れないからだ、と言いディナを驚かせる。何故ならベガー・マスターの感じ方は彼女自身とほとんど同じだったからだ。

ベガー・マスターは、配下の乞食たちに半日休みを与え、シャンカーの葬儀の行列の起点となるベジタリアン・レストランの前に集合させる。それは「足の不自由なもの、盲目のもの、手足を失ったもの、病気持ちのもの、顔をそがれたもの」(AFB, p.493) が集う異様な光景であったため、たちまちのうちに人だかりができる。あるものは、行列を病院の野外クリニックかと思ひ、ベガー・マスターは、やつらはこれをサーカスだと思っているのだ、と吐きだすように言い、あの連中にとってこれはフリーク・ショーだ、だが、いつあの連中だつてこのなかに入らないとも限らないのに、とまくしたてる。それを見てマネックは、ベガー・マスターはシャンカーを失った深い悲しみを隠すために喋っているのだ、と感じる。このようなマネックの鋭い洞察は、彼自身も口には出せぬシャンカーの死への悲しみを抱いているからであろう。

やがて火葬場に向けて行進が始まるが、大半が足の不自由な乞食たちのたちのためナメクジのような速度で進む。あるものは筋肉の委縮の為にカエルがしゃがんだような格好で手を使って台座を動かし、他のものは、カニのように横向きにしか進めない、また他のものは、身を二つ折りにし、手と足を交互に動かし、お尻をラクダのコブのように突き上げながら進むのであ

る。

しかし乞食たちはこの新しい経験を楽しみ、陽気になり、それはまるでお祭りのようであった。ディナは、それを死者への冒瀆ととらえ悲しく思う。だがマネックは、乞食たちにそれ以上のことは期待できない、乞食たちはこのように盛大な葬儀で悲しんでもらえるシャンカーを羨んでいるのかも知れない、と言う。そして心のなかで、「死を弔うことにどういう意味があるのだろうか？ 棺台の上にいるのは自分かも知れないし、自分が死んでも世界はそのまま何の変化もなしに動いてゆくだけだから」(AFB, p.8470), と思うのである。

ここでマネックの心を占めているのは、シャンカーの死への悲しみとは別の、人間の生きる世界、つまりこの世界についての彼の感じ方なのである。それは、一人一人の人間が世界に変化をもたらすことができる、というポジティブ思考とは対極にある世界の無情さ、つまり個々の人間の生きる努力など意に介さない世界の超越的無情さなのである。ディナとマネックの死への感じ方の違いは、生きることに積極的な意味を見出すかどうかに関わっている。そしてそれは、後に、職人たちが乞食になってしまっても生きて行こうとする姿をマネックが見た時のマネックの反応に表れるのだ。

ベガー・マスターにとっての火葬の意味

ディナは、ベガー・マスターに、ヒンドゥー教の火葬の際の振る舞いや火葬について質問をするが、ベガー・マスターはディナたちが「ただそこに居るだけでシャンカーに敬意を払うことになるのだ」といい、火葬について、それが終わった後で、「シャンカーを適切な形でこれからも続く旅へと送りだすことができたと感じるのは気分の良いものだ」。そして「次の世では台座を必要としない人生を歩んで欲しいものだ。いつも火葬の後、これでこの世での人生と死の間にバランスが取れると感じるのだ」(AFB, p.495) と輪廻観に基づく死後の新しい人生で報われる可能性について語る。つまりベガー・マスターにとって火葬は、これでシャンカーが死後報いられるという思いを持たせてくれる儀式であり、シャンカーを失った悲しみに耐える力と成るのだ。

そうこうするうち行列は突然、警察の機動隊の攻撃を受ける。行列を見ていた人のなかで、これを腐敗した政治家・官僚たちを揶揄した反政府系活動家による偽装葬儀だと誤解し、警察に通報したものがいたのだ。だが、機動隊の隊長が行列のなかにベガー・マスターの姿を見て誤りに気づき、深く陳謝し、逆に警官に乞食の行列をエスコートさせる。そこにディナの兄ナズワンが車で通りかかる。ナズワンは警察のエスコート付の葬儀の行列にディナが加わっているのを見かけ、彼女が関係する会社の重要人物が死んだのだと誤解し、ディナに話かけ、乞食の死を弔うものだとディナから聞いてもただちに信じられず、冗談ではないとわかると口をあぐりあげ、口をとじないとハエが入るわよ、とディナに笑われる。そして「乞食の葬儀の行

列に参加するとは、一体お前はどこまで落ちぶれたら気が済むのだ！」(AFB, p.497) といい、「俺の妹が乞食の葬儀の傲列のなかにいるのを人が見たら・・・」と言いかけたとき、近づいてきたベガー・マスターに行列に誘われ、あやうく自分も参列するはめに陥りそうになると、あたふたと車に乗り込み逃げてゆくのだ。

葬儀の場面の意味

こうしてこの乞食たちの葬儀場への行進の場面は悲喜劇の様相を呈する。それは事柄の真相としてのシャンカーの悲劇的な死が、それを弔う乞食たちの行進という外観を取ることで生じている。そして見物人はその外観に捉われ、様々な意味づけを行進に与える結果、シャンカーの死の真実からの乖離が生まれ、滑稽な効果を生み出しているのだ。

特に、兄のナズワンとディナとのやり取りは滑稽であり、意味深い。ここには、シャンカーの葬儀に参加することをためらったディナの姿はない。あわてて逃げてゆくナズワンを笑うディナの姿は、保守的上流中産階級の規範意識から彼女がいかに離れた所に来てしまったのかを示している。そして何よりも、ディナは自分が辿り着いた場所にしっかりと足をつけて立っている。そしてイシバやオムが、政府の家族計画の犠牲者となりシャンカーのようになってしまったときにも二人を従来と変わらぬ態度で支えることができたのである。

だが、マネックは、それとは対照的な態度を取る。マネックの心は三日前行われた別の葬儀のことを考えていたのだ。その葬儀は、寮から失踪し、警察の死体置き場に運ばれたアビナッシュの葬儀のことだった。マネックは、アビナッシュの父親が自分の息子の体が燃えてゆくのを見つめる姿を想像しつつ、良き人間、正しいことをする人間が無情に葬られる世の中の空しさを再びかみしめているのだ。

イシバとオムを再び襲う悲劇

他方、オムの結婚の為に故郷の町を訪れた職人たちを待ち受けていたのは政府の人口抑制計画であった。町で二人を迎えたアシュロフによると、故郷の村でナラヤンをリンチし家族全員を焼き殺した地主のタクール・ダラムシが、今では地域の「家族計画センター」の所長になっていたのだ。タクールは、非常事態のもとでその勢力を村から町にまで広げ、今では国民会議派の大物と目され、次の選挙ではこの州の首相になるという噂もあるほどだった。そしてタクールは、最近では体裁をかまうようになり、誰かを脅すときには、自分の手下を使わず、警察を使うようになった、という。そして人口抑制計画を利用し、大儲けしているという。その一つは、部下を村に送り半強制的に村人に手術への「ボランティア」を募り、ボランティアへの政府の報償金を自分のポケットに入れることであり、もう一つは、そのボランティアたちが手術にやってくると、政府から課せられたボランティアを集めるノルマをまだこなしていない公務員や教

師を集め、そのボランティアをセリにかけ、落札された金を自分のものにするのだという。公務員や教師はノルマをこなさないと給料を下げられるため、応じざるをえないという仕組みである。

イシバとオムは、「家族センター」の前で偶然タクールと鉢合わせし、オムはタクールへの怒りと憎しみを露わにする。だがタクールは足を止め、静かに「お前が誰か知っている」と言い残し車に乗り込み去って行く。そして、彼らが町の広場にいと、警察の車が突然やってきて他の人々とともに清掃トラックに無理やり乗せ、町はずれの手術キャンプに連れて行く。だが、メスを殺菌する機械が故障し、水を沸かしての煮沸殺菌に変えられる。それで手術のスピートが落ち、夕方になっても順番を待つ人々が滞る。それを見たセンターの事務長は医師を脅かし、殺菌をなおざりにしてでもスピードを上げるように指示する。そこで医師たちは不十分にしか殺菌されていない器具を使って手術を続行するのだ。そしてイシバたちの番がやってくる。イシバは担当の医師に自分はいいが、オムはこれから結婚する身なので、必死に手術の免除を懇願する。しかし、誇りの高いオムは何もいわなかった。オムにはイシバの態度が卑屈に思えたのだ。

パイプ・カットの手術の後、イシバはオムの結婚話もこれで終わりだと嘆くが、ある男が、この手術は元に戻すこともできるのだと教え、イシバに希望を与える。だが、夜が来ると、タクールがテントを訪れ、オムの前で立ち止まり、医師に指示し、精巣除去手術をさせ、イシバの最後の希望を奪う。

次の日、イシバはオムを近所の医師に診てもらおう。医師は、オムが去勢されたことにあきれたが、別に驚きはしなかった。カーストがらみの暴力で指、手、鼻、耳等が切られるという事件が近くの村々で時々起き、いつも証拠不十分で葬られてしまうのに慣れていたので。そして傷を見た医師は、睾丸が綺麗に切り取られ、傷口がうまく縫合されているので一週間もすれば良くなるという。二人は、その足で警察に訴えに行く。しかし警察は、去勢とパイプ・カットを間違えた事件だと見なし、これは「家族計画センター」の所轄だと言ってとりあわない。そこで二人は、「センター」に行く。オムは、確かに去勢されたことを示そうとして傷口を見せようとするが、俺は医師ではないし、一度お前たちのいうことを信じ始めると国中の去勢された人間がやってきてお金を政府からせびり始め、家族計画プログラムはつぶれてしまう、警察を呼ばれたくなかったらここからうせろ、とこれまた追い返される。どこでも取り合ってもらえない状況のなかで、オムは、そもそも故郷に結婚の為に来たのが間違いのもとだ、とオムを無理やり結婚させようとしたイシバまで攻め始める。それに対し、イシバは最後に、生まれた土地を訪れ、甥を結婚させるのは罪か？好きな所にいけないなんて何という人生だ、何という国だ！と叫ぶ。

だが、事はオムが去勢されただけにとどまらなかった。パイプ・カットされた折に十分な殺

菌されていないメスが使用されたためにイシバの傷にバイ菌が入ったのだ。イシバの傷は激しく痛み、腫れが足へと広がって行きく。病院で薬を貰うがそれも効かず、再び病院に行く頃には足は黒く色が変わっていて、医師は毒が足にまわっていて切るしか命を助ける手立てがないという。こうしてイシバは両足を切断される。

病院に入院したとき、イシバは何度もディナに事情を説明する手紙を書くようにオムに言ったのだが、オムはその手紙を書くことができなかった。短い間のこのように凄まじい展開をどう手紙で表現すればよいのかわからなかったのだ。

足を失ったイシバは、これで自分の人生は終わりだ、と絶望するが、オムは、シャンカーの例をあげて、あんたにはまだ手と指がある。ディナの手動のミシンを使えるじゃないかと励まし、シャンカーが使っていたような車付きの台をイシバのために作ってもらい、自分が引けるように紐を台座の前につけてもらうのだ。こうして4カ月後、二人は再びディナの家をめざし列車に乗ったのだ。

ディナの人生の転換

他方、ディナにも彼女の人生の大きな転換点が訪れていた。一つは、マネックが成績不良で学位プログラムを受けることができなくなり、ドバイに技師として出稼ぎに行くことになったのだ。そして、ディナの仕事を家主から守ってくれていたベガー・マスターが、自身の非道な行いの為に恨みを買って殺されるのだ。こうして守り手を失ったディナは、家主に家を追い出され、兄のナズワンの家に居候せざるを得なくなる。こうしてあのユートピア的な日々は跡かたもなく消滅する。だが、今のディナはかつてのディナではもはやなかった。立ち退きをせまりにやってきたヤクザまがいの男たちを前にしても、人生の一つの時期が終わりつつあり、新しいものが始まるのだ、と冷静に前向きに受け止める。そしてかつては犬猿の仲であったナズワンとも卑屈になることなく、やってゆくことができるようになっていたのだ。

エピローグ

こうして物語は、一気にプロローグに進む。マネックはドバイから8年ぶりにインドに戻り故郷のカシミールを訪れた後、「海辺の都市」のディナを訪れるのだ。ドバイでの出稼ぎ技師としての金を稼ぐだけの8年間は、マネックにとって空虚なものであった。だがマネックは、自分に次のように言い聞かせていた。「海辺の都市」では違う、物事は、いつも悪い結果に終わるわけではない、そのことを証明するんだと。そしてマネックはオムやイシバやディナが幸せに暮らしている姿を想像する。「この世のなかに惨めさがいっぱいあるとしても、見るべきところを知っていれば、十分な喜びもまたあるのだ」(AFB, p.598)と信じたかったのだ。

だが、マネックが8年前に体験した現実を見る影もなく消え去っていた。かつてディナの家

があった低家賃のアパートに代わって高級アパートが建っていた。マネックはディナが追い出されたことを知る。そして再び絶望的感情に捉われる。だが、マネックはディナの兄の家を思い出し、ディナを探しだし、8年ぶりに再会する。

ディナと会ったマネックはイシバとオムが、今では乞食をしている、と聞き、「そんなことをして恥ずかしくないのか？」と口走るが、ディナは「事情を知らないでそんなことを言うものじゃない」と鋭い口調でたしなめる。そして二人が帰った故郷の町で何が起きたのかを語る。それを聞きながらマネックは、「自分の体が冷たいナイフで切り裂かれるように感じ、凍りついたように座っていた」(ABB, p.605)。聞いているのかい、というディナの言葉にも、マネックの返事には気がなく、表情も無表情である。そしてすぐにそこに二人がやってくるので会うかと聞かれ、マネックは、会ったときどう振る舞っていいのかわからない恐怖感から断る。家を出たマネックは通りをやってくる二人の乞食に気づく。一人はシャンカーのように台座に座り、もう一人は台座の前につけた紐を引っ張っていて、マネックの前を通り過ぎるときに施しを乞う。マネックは、「何と声をかけようか？」と必死に考えるが、「彼の愛と悲しみと希望の言葉は石のように黙したままだった」。心のなかでは、「イシバ、僕だよ、マネックだ、わからないのかい？」(AFB, p.608)という言葉が頭のなかを駆け巡るのだが、口からは出てこなかった。

マネックが、駅のプラットホームから通過列車に飛び込み自殺をしたのは、その後のことであった。

イシバとオムのディナの家での会話

ディナは、イシバとオムがやってくると、マネックがやって来たが、急ぎの用事があると言ってしまったことを知らせる。だが、道ですれ違った時、二人とも、それがマネックであることに気づいていたのだ。

オムは、マネックは俺たちに気づかなかったか、そうでなければ無視したのだ、俺たちが知っているマネックだったら俺たちが来るのを待っていただろう、という。しかしイシバは、マネックは遠いところに行っていた、そうすると変わるものだよ、という。だから責めるべきじゃない、といい、ディナも賛成する。

家を去るときイシバは荷馬車の御者よろしく馬役のオムに「さあ行くぞ」と声を掛けると、オムは頭を振りつつ足をふんばり台座を引き、ディナを笑わせる。三人の間には、マネックが正視できなかったものを笑いの種にして楽しむ関係ができていくのだ。このどん底の人々のたくましが、マネックには見えなかった希望なのかもしれない。

タイトルの「素晴らしいバランス」とは、希望と絶望の「素晴らしいバランス」を実現したインドの現実についての言葉では勿論なく、それとは程遠い理不尽なインド社会の現実へのア

イロニーなのか？それとも、最後の場面に見られたように、絶望的に理不尽な現実のなかでも人生に喜びや希望を見出すことによって、絶望との間に「美しいバランス」を心のなかで実現する人々の逞しさのことなのであろうか？筆者は、絶望的な人生に直面しつつ、そのなかになお生きる希望を見出す人間力を獲得した二人の職人とディナの姿につけられたものと解釈したい。

注

- 1) Rohinton Mistry, *A Fine Balance*, Toronto, McClelland & Stewart Inc., 1995.
拙論では First Vintage International Editions を使用。
- 2) “An Accidental Family”, A.G. Mojtabal, June 23, 1996, *The New York Times*.
(<http://www.nytimes.com/1996/06/23/books/an-accidental-family.html?pagewanted=all&src=pm>)
- 3) 例えば、次のサイトをご覧ください。http://www.goodreads.com/show/5211.A_Fine_Balance
- 4) <http://januarymagazine.com/profiles/mistry.html>
- 5) Savita Goel, “A Literary Voyage To India: Rohinton Mistry’s *A Fine Balance*”, ed., Jaydipsinh Dodiya, *Contemporary Indian Writings in English*, Atlantic Publishers and Distributors, India, 2001, P.60.
- 6) Om P. Junepa, “Oxotomy of Nonalighned Epistemological Expatriate Writer: *The Ontology of Naipaul and Mistry*” *Critical Practice*, Vol.IX, No.1 (2002) .
- 7) Nilufer E. Bharucha, *Rohinton Mistry: Ethnic Enclosures and Transcultural Spaces*, 2003, Rawat Publications, Jaipur and New Delhi, p.150, p.167.
- 8) Jaydipsinh Dodiya, *Perspectives on the Novels of Rohinton Mistry*, Prabhat Kumar Sharma for Sarup & Sons, India, 2006, p.22.
- 9) “Resistance and Representation: Postcolonial Fictions of Nations in Crisis”, Nagesh Rao. (<http://postcolonial.org/index.php/pct/article/viewArticle/288/96>)
- 10) Jaydipsinh Dodiya, *Perspectives on the Novels of Rohinton Mistry*, Prabhat Kumar Sharma for Sarup & Sons, India, 2006, p.39.
- 11) 『現代インド英語文学の世界—グローバリズムを超えて』 編著 橋本横矩 木苺 正行 鳳書房 2011年。
- 12) 「ミストリーの楽しみ (と少しの不安)」小川高義 『英語青年 特集：インドの英語小説』2007年1号 p.595「カースト制という元来パールシーとは異質な問題にまで、視野を広げる。・・・筆者個人はやや疑問視している。・・・作家が持ち味としている庶民性と社会性の a fine balance が崩れていないだろうか」。
- 13) Bharati Mukhereji は、*Jasmine* (Grove Press ペーパーバック版) のなかでニューヨークのクイーンズのインド系移民が住みついた地区のなかでさえ、大きなアパートのなかで言語・カースト・職業に分かれて家族どうしが付き合っている様子を描いている。p. 146。
『インド人の頭の中』 冬野 花 中経文庫 (p.105) では、違う階級が同じ場所に住んでいても絶対に混ざり合わない様子が描かれている。
- 14) *Rohinton Mistry*, Peter Morey, Manchester University Press, 2004, p. 123.

- 15) Wikipedia (<http://en.wikipedia.org/wiki/Dalit>)
- 16) Wikipedia (<http://en.wikipedia.org/wiki/Zamindar>) 『美しき』に出てくる Thakur はインド北部の Rajasthan (ラジャスタン) 州での呼び名である。
- 17) *India After Gandhi*,
- 18) (http://india.wikia.com/wiki/shiv_Sena) シブ・セナの創立者のバル・タッカー (Bal Thackeray) が 2012 年 11 月 17 日に亡くなり、ムンバイは封鎖され、何十万という市民が葬儀に参加したのである。国際都市とされているムンバイでヒンドゥー・ナショナリズムを掲げムズリム住民に恐れられたこの政党が未だに庶民の大きな支持を得ているのがインドの現実である。このニュースは大きな国際ニュースとして世界に報道されている。その内の一つを紹介する。(blogs.wsj.com/indiarealtime/2012/11/19/photo) また、その死を受けてタッカーについての Wikipedia もすぐに書き換えられている。 en.wikipedia.org/wiki/Bal_Thackeray
- 19) このあたりの事情については、ムンバイのヤクザの世界とヒンドゥー過激派の関係を描いた拙論『聖なるゲーム論—』を参照いただきたい。
- 20) ガンジーとナイポール
- 21) "Protests Awaken a Goliath in India" by Jim Yardley, International Herald Tribune NY Times, Asian Pacific, Oct. 29, 2011. <http://www.nytimes.com/2011/10/31/world/asia/indians-middle-class>
- 22) Arundhati Roy, *Conversations with Arundhati Roy: The Shape of the Beast*, Hamich Hamilton an Imprint of Penguin Books, Kindle Edition, 2008. (Location: 927 of 3888)
- 23) 参照：「インドの衝撃」NHK スペシャル取材班 文芸春秋社、2007 年。第 7 章上記のロイの書物につけ加え、YouTube の DAM/AGE: a documentary about ARUNDHATI ROY & the Namada Dam Project 等。

(加藤 恒彦, 立命館大学国際関係学部教授)

A Reading of Rohinton Mistry's *A Fine Balance* as a Narrative of the Formation of National Character

This article focuses on clashes between the old and new ways of life and values through which a new Indian national character is being created, as depicted in Rohinton Mistry's second novel, *A Fine Balance*. The first clash is delineated in a series of events where a Dalit in a rural village, encouraged by Gandhi's Independent Struggle, tries to cross the caste line by making his two sons tailors in a town, much to the anger of Thakur Dharamsi, a landlord. Subsequently, 20 years after Independence, one of his sons, frustrated by the fact that nothing has changed, bravely challenges the established system by trying to cast his own vote at the time of an election, only to be tortured to death by the Thakur, the landlord, together with his whole family who were burned to death in their house.

The second clash happens when the other son and his nephew go to "a city by the sea" to find work, get settled in a slum and are employed as tailors by Dina, a very strong Parsi middle-class widow, who had been struggling to maintain an independent life since the death of her husband. This time the clash is between Dina, the employer, and the two tailors, the employed, especially the young and proud Omph, over working conditions. But this minor clash is overshadowed by unfettered execution of government power under Indira Gandhi's State of Emergency: the tailors' slum is suddenly bulldozed and they are obliged to sleep on the pavement and then are taken forcibly to an irrigation project site by the police and compelled to work like slaves for a construction company, without compensation. As the two tailors suffer from such terrible treatment by the government and police, Dina is obliged to help them by providing accommodations for them in her rented house. Thus they begin to live together under the same roof. Then Dina with her conservative middle class background is faced with her own prejudices against lower-class people. With the help of young Maneck, a Parsi student who had been raised in a more liberal family, Dina begins to overcome her biases and to cross the class line and achieves a genuine friendship with the tailors. Dina goes so far as to attend the funeral of a beggar who had helped the tailors in the irrigation work camp. And their friendship does not waver even when, at the end of the book, they become disabled and have to live as two beggars at the hands of the Thakur, after returning to their hometown. This article mainly focuses upon this process of human change, because this should be an important part of the formation of the new national character in India where differences in class, caste, religion and gender have created so many dividing lines among people, which must be overcome to realize the new and truly democratic

立命館国際研究 25-3, March 2013

ideal upon which Independent India was established.

(KATO, Tsuheviko, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)